国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第十七課　あのいわまで　およげますか：可能の表現

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2020-03-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 国立国語研究所
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002796

日本語教育映画解説17

基礎篇第十七課

あのいわまで　およげますか

――可能の表現――

国立国語研究所

前　書　き

国立国語研究所では，昭和49年度以来，日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて，日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来，文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は，各課５分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ，それを教育の必要に応じて使用する補助教材，また，系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので，全30課を予定している。

映画の作成にあたっては，原案の作成・検討から概要書の執筆まで，また，実際の制作指導においても，日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は，映画教材の作成意図を明らかにし，これを使用して学習し，指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第十七課「あのいわまで　およげますか」の解説は，日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し，執筆にあたったものは，次のとおりである。

本文執筆　　野元菊雄（日本語教育センター長）
資料1.，2.　　日向茂男（　〃　日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室）

昭和57年３月

国立国語研究所長
林　　大

目　次

1.　はじめに……………………………………………………………………1
2.　この映画の目的・内容・構成………………………………………………2
2.1.　目的・内容……………………………………………………………2
2.2.　構成——場面を中心として…………………………………………3
2.2.1.　言語場面，言語表現についての扱い…………………………3
2.2.2.　言語場面，言語表現についての解説…………………………4
3.　この映画の学習内容のまとめ……………………………………………29
3.1.　可能の表現……………………………………………………………29
3.1.1.　可能動詞と「れる／られる」……………………………………30
3.1.2.　「できる」について…………………………………………………36
3.1.3.　その他の可能の表現………………………………………………38
3.1.4.　能力可能と状況可能………………………………………………40
3.2.　可能を表す言い方にかかる副詞(句)…………………………………41
3.3.　その他の主な学習項目について………………………………………42
4.　練習問題………………………………………………………………………44
5.　参考文献………………………………………………………………………48
資料1.　使用語彙一覧…………………………………………………………49
資料2.　シナリオ全文…………………………………………………………72

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は，初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので，この映画「あのいわまで　およげますか」は，その第十七課にあたるものである。

この映画の企画，概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等にあたったものは，次の通りである。

昭和53年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田	敏子	国際基督教大学専任助手
川瀬	生郎	東京外国語大学附属日本語学校教授
木村	宗男	早稲田大学語学教育研究所教授
窪田	富男	東京外国語大学教授
斎藤	修一	慶応義塾大学国際センター助教授

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元	菊雄	日本語教育センター長	
武田	祈	日本語教育センター	日本語教育教材開発室長
日向	茂男	〃	日本語教育教材開発室研究員
清田	潤	〃	〃　技官

この映画「あのいわまで　およげますか」は，日向茂男，清田潤の原案に協議委員会で検討を加え，概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は，日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化，つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり，また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については，協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は，日本語教育教材開発室の日向茂男が全体企画・編集を行い，

執筆には日本語教育センター長・野元菊雄があたった。また資料1.，資料2.は，日向茂男が担当した。全体の企画，また執筆にあたっては，この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在，この映画は，より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお，この映画は，そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画の主要な目的は，副題にも示してあるように，可能を示す表現(もちろん不可能を示す表現も含まれるが)のいろいろを提示し，その意味・用法の理解をはかることにある。なお，副次的に扱う項目もあり，これらを概略述べると，次のようになる。

(1) 可能を示す表現

この映画には，広くいって可能を示す表現が24回出てくる。このうち，いわゆる可能動詞が一番多くて16回である。あとは多い順に，「れる／られる」

によるもの5回，「～ことができる」という形によるもの2回，特殊な可能を示す動詞1回となっている。可能を示すのにはこの他の方法もあるので，これらについても後に概観することにする。

(2) 可能な状態に到達したことを示す表現

具体的には「(泳げる) ようになる」という表現である。

(3) 可能を示す表現に関わる連用修飾語等

「もう」「まだ」「全然」などのほかにも「上手に」「うまく」などがある。「うまく」などは形容詞の連用形（副詞形）を使ったものである。

(4) 試みの動作を示す表現

「～てみる」という表現である。これは4回この映画には出てくる。

(5) 難易を示す表現

具体的には「～やすい」「～にくい」がこの映画では出てくる。

(6) 勧告を示す表現

「～といい」であって，この映画には4回出てくる。

(7) その他

以上について可能を示す表現を中心にしながら適宜解説することにする。

2.2. 構成――場面を中心として

2.2.1. 言語場面，言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については，以下のとおり扱うことにする。

1. 映画の構成に従って場面を分けるときには，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，……のようにし，それをさらに小場面に分けるときには，Ⅰ-1，Ⅰ-2，Ⅰ-3，……のようにする。
2. 言語表現については，文単位で①，②，……のように通し番号をつける。文の変種を引用するときには，′の印をつけ，①′，②′，……のようにする。変形引用が二つ以上あるときには，″，‴，……の順で′を重ねていく。
3. なお，この映画の中に現れていない文や語句を例示するときは，〔 〕

付きの番号をつけ，その変種の引用には，2. の場合と同様，′印をその番号につける。文や語句を束にして例示するときも，出現順に通し番号をつける。

以下の言語表現の扱いについては，文単位の認定に多少問題のあるところもあるが，ここではその問題に積極的には触れない。なお，①，②，……の文番号は，使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. 言語場面，言語表現についての解説

この映画の主題は「可能表現」であり，主として泳ぐことができるかどうかという点に関して話題を展開する必要上，海水浴場に場面をとり，その他この場面で自然に出てくる可能を表す話題をとり入れている。

日本では，気候の関係から，海水浴は普通，沖縄・奄美を除いて，7，8月を中心としてその前後に行われる。日本人の夏のレジャーのうち，住んでいる場所にもよるが，比較的，手軽に，また安く楽しめるものである。

レジャーとしての海水浴は，日本では明治の終わりごろに始まり，戦争中を除いて年々盛んになっているが，近年はプールでの水浴がこれに加わってきた。

海水浴はもちろん海岸でするものであるが，都会に交通の便がよくて砂浜の多い場所には，更衣所，休憩場，食堂，貸ボート・ヨットなどの施設が臨時に，あるいは常時あって，これらを「海水浴場」という。日本では，ホテルや個人の邸宅が，一定の海岸を占有して公衆に開放しないということは比較的少ない。

場面になっているところは，千葉県勝浦市鵜(う)原というところである。千葉県は東京に近いこともあって，海水浴場が多い。特に東京湾側でなく，太平洋岸は，外海に面しているので水もきれいで海水浴場としての適地が多いところである。

この映画は大きく分けて次の七つの場面に分けられる。

Ⅰ　駅のホームで

Ⅱ　浜辺で（1）

Ⅲ　海の中で

Ⅳ　レストランで

Ⅴ　海辺で（2）

Ⅵ　つき出た岬で

Ⅶ　海辺で（3）

各場面は必要に応じて小場面に分けることができる。これは以下ではⅡ－1などのように示す。

また，さらに教材利用上の便宜として，

Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ（Ⅰは導入部）

Ⅳ

Ⅴ＋Ⅵ＋Ⅶ

のように三分割することもできる。すなわち，このそれぞれを独立教材としても利用できる。これは基礎編5分の映画の枠組としては，典型的な構成である。

登場人物のうち，主なものは，この鵜原の人か，あるいは先にここへ遊びに来ている，和夫と真理子の兄妹とそこへ，友人の夏子が弟の明を伴って遊びに来たという，計四人である。ストーリーや画面から想像するところでは，夏子は真理子の友人であったが，真理子と友人としてつきあううちに，真理子の兄の和夫と親しくなり，今では互いに好意以上のものを感じているところであろう。

以上各場面へ順にその場面の説明，そこに現れている言語表現についての問題点を説明しよう。

Ⅰ　駅のホームで（①）

全体への導入部であり，場所，人物などが紹介される。

場所は上にも説明したように千葉県勝浦市鵜原。その外房線鵜原駅に電車が着いたところから映画は始まる。普段着の和夫と真理子が出迎えに来て，

プラットフォーム（ホーム）で待っている。普段着であるので，彼らはここの人か，またはここに来て滞在中の人であることがわかる。そこへ電車が入ってくる。電車から夏子と明が他の乗客にまじって降りてくる。夏子の服装は普段着よりは多少はいいが，リゾートの海水浴場に遊びに来る人の平均的な服装をしている。

四人は，簡単な友達同士のあいさつをする。このあいさつの仕方ぐらいが，上述のような関係の友人としては普通であろう。

あいさつを終って四人は駅のブリッジを上がる。このブリッジを「跨線橋」という。プラットフォームと駅の出入口とを結ぶものである。このように鉄道線路の上をまたぐ橋は地方では普通であるが，都会では地下道となっていることが多い。画面の跨線橋には屋根がついていないが，ついている方がはるかに多い。なお，日本では道路を横断するのにもブリッジによることが都会地などでは多い。これは「歩道橋」といい，この場合は屋根がついていないのが普通である。

ここの跨線橋は高くなっていて，しかも屋根がないので遠くからよく見える。このブリッジの上で，

和夫「①ほら，あの海ですよ。」

と言うのは，これから彼らが泳ぐ海の，夏子への，また映画を見る人への紹介である。

「ほら」は，注意を換起する感動詞。「あの海ですよ」は，その上に「これから泳ぐのは」「今まで話題にしていたのは」をつけるか，または「あれがくだんの海ですよ」「あれが例の海ですよ」の意味である。

Ⅱ　浜辺で（1）（②～⑳）

上で紹介された場所・人物はここで一層はっきりと提示される。後述のように，人物関係は言語形式によって具体化され，また，泳げるかどうかをめぐっての会話から，可能の表現という主題もはっきりと提示される。

Ⅱ－1　明が泳げるかどうかをめぐって（②～⑤）

弓なりに湾入した砂浜で海に入る前の，これから泳ぎを始める前の基本的な情報を和夫は得ようとしているわけである。海には岩場も見えている。

和夫「②明君は，泳げますか。」
明　「③あそこの岩ぐらいまでは，泳げます。」
和夫「④ほーお。
　　⑤ずいぶん，泳げますね。」

②の「明君」は，同輩あるいは目下の男性について，呼びかけ，言及ともに使われる。「明」は姓名の名であり，このような家族同士のつきあいなどのときに名が使われる。そうでないときには，姓を使う。日本ではこのように，「明」と名だけで呼んだり言及したりすることは，あとで㊿に出てくるように，家族内できょうだいで上から下に，親が子にのようなときだけである。日本人にとって，姓でなく名で呼ばれることは，「さん」なり「君」なりをつけてであってもなれなれしすぎているという感じでおもしろくない。あるいは目下と思われているかと考えておもしろくない。したがって，そのように日本人を呼ぶのは，特に日本語の会話の中では，一般によくない，としなければならない。友人間では姓で呼び捨てにする場合もあるが，これは男性の友人同士に限られている。あるいは学校の仲間では目下には姓だけで呼んでもいいが，このような場合でなければ，目下についても姓だけで呼ぶのは異常であり，失礼である。

「明君は」の「は」は，⑥の「夏子さんは？」の「は」と二つの対比において話題を始めるのに使われている。

「泳げますか」の「泳げる」はこの映画の主題であるので，あとで3.詳しく述べる。

ここで「ます」を使っているのは，このような年の離れている男の子に向かっての男のことばとしては一般より丁寧である。これはあるいは，明の姉である夏子の存在の故であるとも考えられる。

③の「あそこ」はいわゆる指示詞である。詳しくは日本語教育指導参考書

8「日本語の指示詞」(国立国語研究所)を見られたい。

「ぐらいまでは」の「ぐらい」はおおよその程度を示す。しかし，これは，その程度ならば，というやや見下したニュアンスを含むから，「泳げません」と否定につづくのはおかしい。

④の「ほーお。」は，感心しかつ驚いたことを示す感動詞である。目上の人に使えないことはないが，目下に使う方が普通であろう。

⑤「ずいぶん」は程度が相当であることを示す副詞。可能を示す表現にかけることができる。

「ね」はごく軽い感動を示す終助詞。

Ⅱ—2　夏子が泳げるかどうかをめぐって(⑥〜⑫)

話題はつづいて夏子に移る。

和夫「⑥夏子さんは？」

夏子「⑦わたしは，ほとんど泳げません。」

真理子「⑧じゃあ，この機会に練習するといいですよ。」

夏子「⑨ええ。」

真理子「⑩お兄さんに習うといいわ。

⑪ね，お兄さん。」

和夫「⑫うん。」

⑥の「夏子さんは？」は②に対比されるもので，②を受けて話題が確定しているので「泳げますか」が省略されている。なお，このように女性に対しては「夏子さん」のように「さん」をつけて話すのが普通である。

⑦の「わたし」は，このような若い女性がよく使う「あたし」よりは少し改まっている。「ほとんど」の下に不可能を示す表現がくる場合は「全く」というわけではないが，「全く」に非常に近いくらい，そのことができないことを示す。

⑧の最初の「じゃあ」は，「では」のくだけた口頭語的表現である。「機会」や「練習」などと漢語を使っているのは少し固い表現と言うべきであろ

う。しかし，「練習する」は⑩の「習う」と似ているが，「練習する」が一人でするのを主体とするのに対して，「習う」のは教える人がいるのが普通であり，したがって習って，またその習ったことを自分でやってみるというように広く言っている。

「〜するといい」は⑩の「習うといい」と同じくそうすることが望ましいということである。It is advisable that……である。

ここでは「いいですよ」といわゆるフォーマルな形をとっていて，⑩の「いいわ」とちょっと違っている。

⑨の「ええ」は女性の肯定の返事としては普通のものであって，同輩およびそれ以下に使われる。⑫と比較せよ。

⑩「お兄さん」は和夫を指す。家族の間では，このように呼んだり言及したりする。さらに，ある家族の一番下の人から見ての「兄」がいる場合は，家族中が，本人さえも自分のことを言及するときを含めて，「お兄さん」を使うことができる。

「いいわ。」は前述のように⑧の「いいですよ。」に比べるとインフォーマルである。ここでインフォーマルになったのは，少なくとも好意を感じ合っている兄と夏子とを冷やかしているからであろう。「わ」という終助詞は標準語では女性専用ではあるが，フォーマルな場合には使えない。

⑪の「ね」は念押し。ここの「お兄さん」は呼びかけ。⑩の「お兄さん」は言及であり，⑩は夏子へのことばである。

⑫の「うん。」は，⑰では女性が言っているが，女性の場合は非常に気の許せる人に対して使うだけで，主として男性に使われる。

Ⅱ－3　真理子が明を泳ぎに誘う（⑬〜⑰）

夏子に泳ぎを教えることを兄にすすめると，真理子は気をきかしたように，この二人を二人のままに残そうと考えて，明を泳ぎに誘うのである。

真理子「⑬じゃあ，わたしたちは，泳ぎに行きましょう。」

⑭ね，明君。」

明　「⑮うん。

⑯向こうの岩まで行けますか。」

真理子「⑰（軽く）うん。」

こうして二人は泳ぎ始める。

⑬の「じゃあ」については⑧と同じ。

「泳ぎに行きましょう。」では「～に行く」の「～」は動詞連用形，またはサ変動詞語幹であり，そのことをするのを目的に行くことを示す。「ましょう」は勧誘である。

⑭は⑪と全く同じ形であり，イントネーションは上昇形である。

⑮の「うん。」は，このような男の子の場合は家族やこれに準ずる人に対しては目上でも広く使う。⑰では相手がずっと年下なので「うん」が気楽に使えるのである。「行けますか」については，3で述べる。

Ⅱ—4　明と真理子の泳ぎをめぐって（⑱～⑳）

岩に向かって泳いでいく明と真理子を見ながらの，和夫と夏子の話。

和夫「⑱明君は，なかなか，上手に泳ぐことができますね。」

夏子「⑲ええ。

⑳真理子さんも，上手ですね。」

⑱の「なかなか」は，（期待していたよりも）かなりよく，という意味である。「上手」はいわゆる形容動詞（ナ形容詞）であって，和語形容詞「うまい」とほぼ同じであるが，「うまい」ほど多義的ではない。技術的，処世的なことについて使う。なお，「うまい」との違いについては，㉜をも見よ。

「～ことができる」の「～」は動詞連体形がきて，その動詞の示すことが可能であることを示す可能表現であるが，詳しくは3. で述べる。「ね」は，軽い感嘆を含んだ念押し。

⑲の「ええ。」については⑨で説明した。友人の兄であるから目上には属するが，このような関係では普通に使われるであろう。

⑳の「上手ですね」は，

⑳′「上手に泳ぐことができますね。」

の略である。

「真理子さん」の「さん」は友人への言及であるが，普通は「さん」をつけて，呼び捨てることはしない。このようなお互いに相手の弟妹をほめ合うというような社交的な文脈ではこのように「君」や「さん」を使う。

「君」は原則としては，男性が同輩およびそれ以下と判定した男性に対して使うが，最近は女性も，そのような男性に対して使うようになってきたようである。あと特殊なものとしては国会内での公式のことばとしては両性によって，上下の別なく両性に対して使われる。

Ⅲ　海の中で（㉑～㊱）

真理子と明とが岩を目指して泳いで行ったあと，残された和夫と夏子が岸に近い海の中で泳ぎを教え，教えられる。

Ⅲ－1　夏子の泳ぎをめぐって（1）（㉑～㉓）

和夫「㉑さあ，そこからここまで泳ぐことができますか。」

和夫にこう言われて夏子は平泳ぎで和夫のところまで泳いでやっとたどり着く。

和夫「㉒泳げるじゃあないですか。」

夏子「㉓でも，少しです。」

㉑の最初の「さあ」は，何か行動を起こしたり，起こさせるときに，自分や相手に言って聞かせ行動のきっかけをつけるときの掛け声となる感動詞である。「～から～まで」は時刻や場所の出発点と到着点を示す。ここの場合の出発点「そこ」と到着点「ここ」とは指示詞であり，これについては③のところで挙げた参考書を見よ。「泳ぐことができる」については⑱を見よ。

㉒の泳げるは 可能動詞。 これについては3を見よ。「泳げるじゃあ」の「じゃあ」は「では」の口頭語形。「ないですか」は「ありませんか」と同

じであるが，「ありませんか」には詰問的なニュアンスがつく場合がある。全体として，⑦で「ほとんど泳げません」と聞いていたにしては泳げるといった意外感があらわれている。

㉓の「でも」は，「泳げるとは言っても」の意味の接続詞。「少しです」は「少し泳げるだけです」の意味である。このように日本ではある能力があることを示したとしても，それが十分ではないことを自分自身でよく弁えている，ということを示してこのように謙遜していうのが一般的礼儀である。この形は可能を示すものについては，

㉒′日本語が話せるじゃあないですか。

㉓でも，少しです。

のように応用することができる。

Ⅲ－2　夏子の泳ぎをめぐって（2）（㉔～㉜）

夏子が大息をついて苦しそうなので，和夫は「ああ，わかった」というように笑って，苦しくなった理由を述べ，手で体の傾斜の度を夏子に示してやる。

和夫「㉔息がしにくいんですね。

㉕体を，こうたてて，泳ぐといいですよ。

㉖顔が上がって，息がしやすいです。

㉗やってみますね。

模範を示すために和夫は泳いで夏子に見せる。手本を示し終わって，

和夫「㉘さあ，泳いでみてください。」

夏子はうながされて泳ぎ始める。和夫はコーチしながらはげます。

和夫「㉙そう，そう，うまいですよ。――

㉚手をかきながら，足を合わせます。

㉛もう少し，大きく手をかくといいですよ。

㉜うまい，うまい，うまいですよ。」

夏子はだんだん息苦しくなって，泳ぎをやめて立ち上がる。

㉔の「息」は「息をする」という形で，呼吸することを示す。これの難易を示すのにはここの㉔の「息がしにくい」が難，㉖の「息がしやすい」が易である。このように，先に「息をする」と「を」を取ったが，難易の対象とするときは，「が」を取る。難の方は㊸に「食べにくい」があり，易の方は㊺に「食べやすい」がある。これらはもし対象物を示すときは「かにが食べにくい」のように，やはり「が」を取る。

次の「ん」は準体動詞「の」の口頭語形である。「ね」は確かめを示す終助詞。

㉕の「たてる」は，垂直方向に体の向きを変えることである。「～といい」については既に⑧，⑩で学習した。また㉛にも出てくる。

㉖の「顔が上がって」は，体をたてると，顔面も水面から離れて上に上がって，の意味である。「～しやすい」については，㉔のところで説明した。「しやすいです」と「です」が「やすい」に接続することについては，日本語教育映画解説 3.「たかくないです，やすいです」で述べた，形容詞への「です」の接続と基本的に同様である。

㉗の「やってみますね。」では，

㉗′してみますね。

でも大体は同じであるが，「やる」は「する」よりも当面の問題になっていることを，というニュアンスが強く，「する」よりも狭い。「みますね」の「みる」は「試みる」という意味である。なお「みる」を使ったものとしては㊷⑩に「行ってみましょうよ。」というのがある。「ね」は相手の同意を求める気持を示す終助詞である。

㉘の「さあ」は，㉑の「さあ」と同じ。「ください」は元来は「くれる」の尊敬語である「くださる」の命令形「くだされ」が変わったものであるが，今は命令というよりは，人に何かをすすめたり，そうしてほしいことをあらわす丁寧表現である。

㉙の「そう，そう」は，ここでは，相手のやっていることが自分にとって満足できる程度であることを示す感動詞である。

「うまいですよ」については㉜のところで説明する。

㉚「手をかく」の「かく」は，実は「手で水を後ろに押しやって（前に進む)」ことである。したがって「かく」の対象物は「手」ではない。「手（で水）をかく」の(　)の中の省略，あるいは「手を(水を)かく（ようにする)」の(　)の省略と見ることもできる。

「～ながら」の「～」は動詞連用形であり，その「～」で示した動作と並行して，この下に示される動作をすることを示す接続助詞である。ここでは，手で水を後ろに押しやると同時に，開いた足を「合わせる」，つまり閉じて前に進むのである。「～ながら」は，なお⑳にも出てくる。

㉛の最初「もう少し」は，今夏子のしている動作より，さらに少しだけ，という意味である。「大きく」は，手をあまり曲げないで，より大きな円を画くように，前から横にまわして，そのとき水を押しやる，ということである。「～といい。」については，⑧などで既に述べた。

㉜の全体は㉙と同様，夏子のやり方をほめてはげましている。㉜は，

㉜′上手，上手，上手ですよ。

でもいいが，このような掛け声のときは「うまい」の方が発音しやすいということもあろうが，「上手」は，このようなとき使うものとしてはもっと幼い者に対してのことばであるという意識があるので，「うまい」を使った方がいいと思われる。「上手」は例えば，やっと歩き出した幼児をほめ，はげますときによく使う。

Ⅲ－3　夏子の泳ぎをめぐって(3)(㉝～㊱)

練習のかいあって夏子は上達してきた。

和夫「㉝前よりも，泳げるようになりましたね。」

夏子「㉞ええ。」

和夫「㉟さあ，向こうまでいっしょに泳ぎましょう。」

夏子「㊱ええ。」

二人は泳ぎ始める。

㉝の「前」は，練習する前，つまり，最初に和夫が夏子の泳ぎを見た時である。「より」は，その前に置かれたものを比較の基準としていることをあらわす格助詞である。「も」は係助詞で「より」を強めている。「前より」でも実質的意味は変わらない。

「～ようになる」は，それが可能な状態に到達したことをあらわす言い方である。㊿55にもこの文型はあるが，それについては3. でも述べることにする。

㉟「さあ」「向こうまで」（⑯の「向こうの岩まで」参照），「ましょう」などについては既に述べた。「いっしょに」は二人以上の人が（ここでは二人が）同じ行動，連れだった行動をすることを示す。

Ⅳ　レストランで（㊲～61）

午前中の泳ぎを終えて昼食のため４人はレストランに入っている。海水浴場近くのレストランとしては，画面のものはそう悪くないし，また込んでもいない。

Ⅳ－１　食事を始める（㊲～㊷）

４人はかにのゆでたのを注文し，やがて大皿に盛られて運ばれてくる。

明　「㊲わあー，すごいなー。

　　㊳いただきます。」

三人「㊴いただきます。」

夏子「㊵わたし，こんなに食べられないわ。」

明　「㊶大丈夫，大丈夫。

　　㊷ぼくが食べますよ。」

㊲の「わあー」は驚きと喜びをあらわす感動詞。「すごいなー。」の「すごい」は形容詞で，程度が普通ではないことを示す。かにの量・大きさに感嘆したのである。「なー」は，感嘆を示す間投助詞の「な」がのびたもので，それだけ強い感嘆を示している。

㊳の「いただきます。」は食事を始めるときのあいさつで，終わったときのあいさつ，56の「ごちそうさま」に対する。日本では普通これらのあいさつなしに食事を始め，終えることは無作法とされる。「いただきます。」と言うときは，だれかスポンサーがいなければ変だということになるだろうが，その場合でもあいさつするのが習慣である。食事をとることができたのは，自然のたまものであるとして，漠然とまわりのすべてへの感謝をあらわすのである，というようなことがいわれている。

㊵で「わたし」と言っているのは「わたしは」（すなわち，他の人は知らないが少なくとも「わたしは」という意味で「は」である）の「は」が口頭語であるため省略されているのである。口頭語ではこのようなことは多い。

「こんなに」は，「こんなにたくさん（は)」のことであるが，「たくさん(は)」はそのときの文脈によって違う。「こんなに」はしたがって「このように」の意味である。そして，その下に不可能がくるのが普通である。ここでは可能を示す助動詞の「られる」をつかってこれを打ち消して不可能を示している。この「られる」については一括して3. で述べることにする。今は，不可能のことが多いと言ったが，もちろん可能がくることもできる。例えば，

④′ こんなに食べられたのにどうして遠慮したの。

㊵″ こんなに食べられるのなら，もっと注文すればよかった。

など。

「こんなに」は，「こんなだ」もあるので，形容動詞とも考えられるが，連体形は「こんな」であり，不完全なものである。ここでは副詞としておく。この場合「こんな」は連体詞と考える。

㊶の「大丈夫」は，いわゆる形容動詞の語幹で感動詞的に使っている。食べられない人がいても，残すことはない，心配するな，という意味で，2回くりかえして強めている。

㊷の「ぼく」は男の自称代名詞で，同輩及び目下との話のとき使う。ここは明は一番下であるが，小さい男の子の場合は目上に対して使うことも許される。しかし，高校生以上になるとこのことを気にする年配の人もいるから

一般には目上に対しては使わないのが無難である。「おれ」はさらに一段乱暴な言い方であって，このような場合には使えないのが普通である。

Ⅳ－2　かにの食べ方（㊸～㊼）

明はさっそく食べ始めようとするが甲羅が固くて食べにくい。そこで，殻を指して，

明　「㊸これ，食べにくいですね。」

和夫「㊹それはね，こうすると，簡単に取れます。

　　㊺ほら，食べやすいでしょう。」

明は教わったように殻を取ってかぶりつこうとする。そこで和夫はあわてて，

和夫「㊻あっ，全部は食べられませんよ。」

と止めて，食べられるところを指し示す。

和夫「㊼ここと，ここしか食べられません。」

やっと明は食べ始める。

㊸の「これ」は「このかに（の殻）は」の意味。「食べにくい」の「～にくい」については，㉔で既に述べた。「ね」は念押し。

㊹の「それはね」の「それ」は指示詞で，相手が手にしているかにの殻を指す。この「ね」も念押しとしていいであろう。

「こうすると」は実際にやってみせるときに使う。「と」は条件をあらわす接続助詞で，「条件の表現」で後に詳しく取り上げる。

「簡単に」は，手軽に，の意味である。面倒なこともなく，ということ。「簡単に」のあと可能表現がくると，面倒なこともなく，そのような状態を得ることができる，ということである。

㊺の最初の「ほら」は，相手に注意を促すときに使う感動詞。「食べやすい」の「～やすい」については㉖で既に述べた。「でしょう。」はこの場合，相手に同意を求める言い方。

㊻の「あっ」は，いきなり明がかぶりつこうとしたので，驚いて発した感

動詞。「全部は」の「は」は，一部は食べられるが，という意味で，全部を対比させて，一部否定を示す。

㊼「こことと」の「と」は並列を示す。「および」の意味である。「しか」は，ある語につけて，それだけと限る意味をあらわす係助詞。この「ある語」は古くは体言に限られていたが，今は「ぼくが行くしかない」のように動詞終止形にも接続する。

V－3　夏子の泳ぎをめぐって（4）（㊽～55）

食事をしながらの4人の会話。明は終始猛烈に食べており，明のことばはすべて食べながらである。

真理子「㊽泳ぎは，上手になりました？」
夏子「㊾まだまだ，上手になりません。」
和夫「㊿ずいぶん，泳げるようになりましたよ。」
明　「51何メートルぐらい？」
和夫「52もう，二，三十メートルは，泳げますよね。」
明　「53そうですか。」
真理子「54それは，すごいですね。
　　　55きっと上手に泳げるようになりますよ。」

㊽の「泳ぎ」は動詞連用形の転成名詞で，泳ぐこと，相手の泳ぐこと，の意味。「上手になる」の形容動詞の活用語尾「に」，また，形容詞の活用語尾「く」に接続した「～なる」はそのような状態に変化することを示す。なお動詞の連体形に「ように」をつけることもできるし，語によっては体言に「になる」をつけてもいい。

㊽′ 泳ぎはうまくなりました？
㊽″ 上手に（うまく）泳げるようになりました？
㊽‴水泳の名手になりました？

などがあり得る。「ました？」は疑問の終助詞はついていないが，その代わり，上昇の疑問のイントネーションで質問形であることを示している。この

使い方はどちらかというと女性が多かろう。

㊾「まだ」は「今になっても，なお」の意味の副詞で，この場合は，夏子としてはもっと上手になりたいし，なれる見込みではあるが，十分な程度には至っていないことをあらわし，二つ重ねることによってこれを強めている。

和夫はこれに対して㊿のように言うことによって夏子をはげまし，またその努力を現場にはいなかった真理子，明に知らせようとしている。

㊿の「ずいぶん」は⑤の「ずいぶん」と同じ。「泳げるようになる」は㊽で既に述べた。

51の「何」はナンと発音し，数量を問うときに助数詞の上につける造語成分である。「ぐらい」はこれで，大体のところを聞いているので，そう正確な数値を求めているのではないことを示す副助詞。体言につくときはここでのように「ぐらい」と発音するのが普通であったが，現代では必ずしもそうでもなく「くらい」と言うこともある。なお③を参照。

ここのように，イントネーションで質問を示すのは，家族的な会話ではよく聞かれるところであるが，親しい間がらでないときは少々なれなれしすぎるという印象をも本人は持つ。普通なら次のようになる。

51′ 何メートルぐらい泳げましたか。

質問者は明であったが，和夫は52のように夏子に同意を求める表現を取って，他の列席者への情報を提供している。

52の「もう」は㉛の「もう少し」の「もう」が「その上になお」の意味であったのに対して「もはや」の意味で，「まだ」の反対語である。下に可能表現がくれば，早くもそのことが可能となったことを示す。しかし下に不可能表現がきたときは，58のように「その上にさらに」の意味となる場合もある。

「二，三十メートル」ははっきりと数量を確定した言い方ではなく，二十メートルか三十メートル，大体そのくらいという意味。

53の「そうですか。」は形は質問であるが，上を受けて「わかった」という

意味である。姉の夏子に言っているのではなくて，和夫に言っている。

㊹の「それは」は上を受けて，「二，三十メートルも泳げるようになったというのは」の意味である。「すごい」は，程度がはなはだしくて驚くほどだ，ということを示す形容詞。

㊺の「きっと」は，自分の見通しとしては必ずそうなるという気持ちをあらわす副詞。下に可能表現がついて，必ず可能となる，と言って夏子をはげましているのである。

Ⅳ－4　食事を終える（㊻～㊿）

やがて，明を除いた３人の食事は終わる。明だけはまだ入る余地があるらしい。

夏子「㊻ごちそうさま。」

和夫「㊼もう，いいんですか。」

夏子「㊽ええ，もう，食べられません。

　　　㊾多すぎますね。」

と夏子は満腹である旨を言うが，明はまだ不足らしく，大皿からもう一匹を取る。そこで夏子は弟をたしなめる。

夏子「㊿明，食べすぎじゃないの。」

明は委細かまわず食べにかかる。

明　「(61)大丈夫ですよ。」

あとの三人はあきれて明を見ている。

㊻の「ごちそうさま」は，㉟のところで述べたように，食事の終了したときのあいさつとして必ず言うべきものである。特に客としてごちそうになったときに忘れてはならない。これに対して主人側のあいさつは「どういたしまして。」「お粗末（さま）でした。」などいくつかあり，また，方言によっても違っている。

和夫はこれに対して，支払いはだれがするかは別にして，この鵜原に，夏子と明を迎えたことから主人役として㊼のように言い，裏にもっと食べたら

どうか，と勧めている。

㊼の「もう」は「もはや」の意味で，意外に早く終わったようで，もっと食べられるのではないか，ということを言外に示している。「いい」はここでは「十分だ」を示す。「よい」は口頭語ではあまり使われない。「いいんですか」の「ん」も準体助詞「の」が口頭語でインフォーマルなときに取る形である。

㊽の「ええ」は肯定の 返事の感動詞。これについては ⑨で既に述べた。「もう」は「この上さらには」の意味。「食べられません」は「食べる」に可能の助動詞「られる」がついたものを打ち消している。これについて詳しくは3. で述べる。

㊾「～すぎる」は，形容詞・形容動詞の語幹について，その程度が適当な度合を越えて不都合と感じられるようになっていることを示す。

㊿の「じゃないの」は「ではないの」の口頭語的表現。㉒には「じゃあ」とのばしたものがあるが，意味は同じである。のばした方がやや 強 め が ある。「の」は終助詞で，疑問や断定を少しやわらげる，女性や子どもによく使われるものである。「明」については②のところで説明した。

61の「大丈夫」は㊶の「大丈夫」と同じで，「心配するな」ということ。69でも明は「大丈夫」と言っており，この年代の男の子の愛用語であろう。

V　海辺で(2)(62～70)

昼食を終えて，おそらく，夏子と和夫は，また泳ぎの練習をしているのであろう。あとの二人，真理子と明は，何となくこのカップルから弾き出された感じ，また二人の側でも気をきかせたつもりで，彼らをほっておくわけであるが，それでもやや所在なさは隠すことができず，どうして間を持たそうかと考えた挙句に，明が真理子に一つの提案をする。

明　「62向こうまで行ってみましょうよ。」

真理子「63どこ？」

明　「64ほら，向こうにつりをしている人が見えるでしょう。

⑥⑤あそこまで。」

真理子「⑥⑥遠すぎますよ。

⑥⑦あそこまで行って，二十分や三十分で戻ってこられません。

⑥⑧お姉さんが心配しますよ。」

明　「⑥⑨大丈夫。

⑦⓪行ってみましょうよ。」

こう言って明が泳ぎだすので，真理子もほっておくわけにいかず，しかたなくついて泳いでいく。

⑥②「向こう」は⑯にもあった。⑯は「向こうの」とあって連体修飾をなしていたが，ここは「あちらの方」という漠然とした場所を示している。

「〜てみる」については，㉗のところで既に述べた。⑦⓪にも同じ表現がある。

⑥③は「どこ？」，これもイントネーションでも疑問であることを示すが，「どこ」自身，場所を聞く疑問代名詞である。このイントネーションつきの「どこ？」は，㊽の「上手になりました？」のところで述べたように，女性に多いが，女性でも，ここのように同年輩以下が相手のときよくあらわれる。

⑥④の「ほら」は①のところで既に述べた。「つり」は「つる」という動詞の連用形転成名詞である。「つる」は，はっきりした目的語があって「はぜをつる」のようなときに使うが，漠然とこのようなときは，例えば「つっている人が……」とは言わないで「つりをしている人」というように言うのが普通である。もしはっきり何をつっているかがわかっていれば，例えば「はぜをつっている人」でもいい。「山登りをしている人」〜「あの山に登っている人」などでもわかるように「〜をしている人」の方が具体性が乏しいという傾向にあるようである。

「〜でしょう」はやはり上昇的なイントネーションで，同意を求めていることを示す。

⑥⑤の「あそこ」はその場所が遠いところなので使っている。

⑥⑥の「〜すぎる」については⑤⑨の「多すぎる」のところで説明した。

㊼の「あそこまで行って…」は，「あそこまで行って，それから（帰るまで，往復二十分や三十分では不可能だ）」という意味である。「二十分や三十分で」の「や」は，少ない方の例をあげて，そんな時間では可能ではない，ということをあらわす。この不可能は「来られません」で示されているが，「くる」に「られる」の接続した形であり，これについては3. で述べる。

「戻る」は「帰る」とほとんど同じであるが，一つはやや文体上の差があって，「戻る」の方が少し改まっている。また意味上は，「帰る」はもとの場所への逆行の過程全部を言うのに対して，「戻る」は帰着を示す。したがって，出発にその家の人から電話があって，今出発して帰途についたばかりだ，と返事する場合は「もう帰りました」と言う。このとき「もう戻りました」は少し変である。

㊽「お姉さん」は夏子のことで，話し相手から見ての呼び方をこのように使うのが普通である。

⑰「～てみる」については㉗で既に述べた。

Ⅵ　つき出た岬で（⑪～㊼）

真理子と明は場面Ⅴで向こうに見えていた岬に着いて，そこでの“事件”が述べられる。

Ⅵ－1　つり人をさがして（⑪～⑯）

岬に到着して岩に登ってきた明と真理子は，そこに，つりざおを見つけたが，浜辺で見てつりをしていたと思った人が見当たらない。

明　「⑪おかしいな，だれもいませんよ。」

真理子「⑫変ですねー。」

とそのとき真理子は岩陰から出ている素足の先を見つける。

真理子「⑬きゃー。」

明　「⑭えっ。」

真理子「⑮足が。」

真理子は驚いたあまりはっきりことばも出ない。明も驚いて，

明　「⑯あっ。」

⑦の「おかしい」は，不審である，変だ，という意味である。笑いたくなるような意味での「おかしい」とは，ある点で結び合うところがある。「な」は自分の判断や主張などについて，これを相手に断定し，または相手に確認を求めるという気持ちを示す終助詞で，男性に使われることの方が多い。

「だれも」は，「何も」「どこも」など不定を示す代名詞に「も」をつけると，一つには後ろが否定表現となる。ここの⑪のように「だれもいない」のほか「何もいらない」「どこも知らない」など。もっとも肯定形がくることもできる。「だれも疑っている」「どこも綺麗だ」など。この場合は，すべてが，という意味である。

⑫の「変ですねー」は，この場面としてはやや丁寧な表現であって，インフォーマルならば，

⑫′変ねー。

となるであろう。

⑬の「きゃー」は，若い女性の驚いたときに発する伝統的な叫び声で感動詞。男は使わない。

⑭「えっ」は，不意を突かれて，「どうしたんだ。」というような，疑問を示す感動詞。非常に驚いたので「えっ」となっているが，それほど驚いていないときは「え」となる。もっと強い疑問のときに「ええっ」ともなる。

⑮の「足が」は，あとに「見える」「そこにある」「出ている」などを省略した表現であって，あまり驚いたために完結した表現とならなかったのである。

⑯の「あっ」は，⑮で真理子が指さしながら「足が」と言ったのでそっちを見た明が，やはり思いがけないものがそこにあるのを見て驚いて発した，感動詞である。感心したときや，ここでのように何かに気付いたとき，予期しないことが起こったときなどに発する。

Ⅵ－2　つり人と話す（⑦～⑧）

二人の驚きの声で，若いつり人が目をさまし，起き上がる。

明　「⑦なあーんだ。

　　⑧眠っていたんですか。」

つり人「⑨ええ。

　　　⑩つりをしながら，眠っていたんです。」

真理子「⑪驚いたわ。」

つり人が起き上がったのを見て，⑦のように明はまず言う。意外な状況に驚いたりがっかりしたときに発する感動詞「なんだ」を強めて「なあーんだ」と伸ばして発音したものである。どちらかというと男の方が多く使う。

⑧は「～ている」の形に準体助詞「の」の口頭語形「ん」に，念押し，確認の「ですか。」をつけたものである。相手が初めての人なので「です」の形を取っている。

⑨の「ええ。」については，既に⑨で述べた。「うん。」でないのは，これもつり人にとって初対面だからであろう。

⑩では「～ながら」の形を使っている。これは㉚でも見たように，この「ながら」の前の動作と後の動作が同時に進行することを示す。同時といっても，話し手の意識としては，後の方に重点がある。例えば「本を読みながら歩いてはあぶない」に対して「歩きながら本を読んでは頭に入らない」など。これを逆の結びつきにしたのではちょっとおかしい。なお，「ながら」の前後は同時進行であると述べたが，眠ってしまったら，他のことは進行できないものが多くなる。ここでもつりはできなくなるはずであるが，糸を垂れたままにしておく，ということで，つりはまだ進行中と拡張解釈することができる。

最後の「です。」は，相手が初対面でしかも若い女性なので，多少丁寧になったのである。直接の問いかけは明がしたのであるが，意識としては真理子を聞き手としている。これに対して真理子が⑪のように「驚いたわ。」とインフォーマルに言うのは，⑬のような悲鳴を聞かれてしまったことに対するて

れくささ，起き上がった若いつり人がひょうきんな善人であるらしいことへの安心感などによるものである。また，驚きなどを示す場合には，フォーマルな表現が消えることもある。「わ」は女性の使うインフォーマルなことばで，自分の判断や主張を相手に納得させたり，自ら確認したりするときに使う。フォーマルな場合，すなわち，目上へなどには使えない。目上への場合も，自分が女性という資格で相手に対していることを示すものである。したがって，上役，先生などに使うのは不適当である。⑩，㊵で既に出ており，また㊾にも出てくる。

Ⅵ－3　つれたものは？（㉜～㊲）

つりをしている人へのあいさつ的な質問を明がして，それに対してつり人はひょうきんな答えをする。その問答――。

明　「㉜何がつれますか。」

つり人「㉝くもがつれますよ。」

明　「㉞えっ，くも？」

つり人は笑いながら足元のバケツを指差す。バケツに海水を入れておいて，魚がつれたらそこに入れておくのである。もう少し上級(？)なつり人の場合は，びく（魚籠）というかご（竹で編んだものや綱で作ったもの）を水の中に垂れておいて，つった魚を入れる。バケツを使っているという点で，このつり人はそう真面目につっているのではないことがわかる。明が驚いたので，つり人は笑って種明かしをする。

つり人「㉟ほら，くもがあるでしょう。」

明と真理子がのぞき込むと，バケツの中の海水に，空の雲が映っている。

明　「㊱ほんとだ。

㊲くもがつれていますね。」

と明と真理子とは顔を見合わせて笑う。

㉜は上に述べたように，つりをしている人に対する常套的な質問である。「つれる」は「つる」の可能動詞である。しかし，能力可能ではなく状況可

能的な感じで，自然にそういう結果になる，という意味が強い。

㊃では「くも」と言っている。「くも」はここのように「ク」を高く発音したときは，標準語では「蜘蛛」と「雲」と両方が考えられる。同音異義語であるから，文脈でどれであるかを決定しなければならない。しかし，この二つの語とも「つる」とは普通結びつかない。「とんぼつり，今日はどこまで行ったやら」（千代女）のように，虫の場合も「つる」と言わなかったわけではないから，蜘蛛の可能性が高いが，現在は虫の用法はあまりないし，明にこの教養があるとも思われない。それに，つり人は，糸を海中に垂れているのであるから，蜘蛛は否定され，雲も空中のものであって，海中のものではない。

そこで㊄のように言って，驚きと不審とをあらわしている。「えっ」については㉔で述べた。「くも？」と問いかけのイントネーションを使っているのは，不審であるとして反問，あるいは今，「くも」と聞いたのは間違っていないか，といった念押しのためである。

㊅の「ほら」は，①の「ほら」と同じ。「くもがいる」でなく「くもがある」なので無生物であることがわかる。すなわち，蜘蛛ではなく雲である。

㊆の「ほんと」は「本当」であるから「ほんとう」であるが，このように短く発音することはよくある。もっとも「本途」との説もあるから，このときは「ほんと」の方が本来であることになる。冗談ではあるけれども，まるっきりの嘘ではない，ということである。「ほんとだ」と「だ」を使っているのは，次の「ます」の形と文体上一致しないが，このような感動詞的な用法であれば許される。

㊇で「つれている」と「ている」の形を取ることができるのは「つれる」が状況可能でそういう状態に自然になっていることを示しているのである。「する」の可能を示す語が「できる」であるが，これをそのまま「できている」と言うことはできない。「できている」は，もうできた状態となってそこに存在するときしか使えない。例えば「泳げている」は変である。これが能力可能にしろ状況可能にしろそのままの状態でその場で固定できないから

である。

Ⅶ　浜辺で(3)(88〜95)

一方浜辺では，夏子と和夫が，真理子と明がなかなか戻ってこないので心配して沖を見て探している。そこへ，真理子と明とが，二人の見ている方向とは反対のなぎさを歩いて近づいてくる。夏子はふりかえって二人を見つける。

夏子「88どこへ行っていたんですか。
　　　89ずいぶん，心配したわ。」
真理子「90ごめんなさい。」
　　　　91あの岬(みさき)まで行っていました。」
明　「92つりをしている人がいたんですよ。」
和夫「93なにがつれていたんですか。」
明　「94くもがつれていました。」
和夫「95くも……？」

和夫と夏子とは少し驚いて，いぶかしそうにするのに対して，明と真理子とはいたずらっぽく笑う。その雲，海の上に浮かぶ夏雲を写して映画は終わる。

88の「行っていた」は，過去においてしばらく他の場所に止まっていたことを示す。「どこへ」でその場所をたずねている。

89の「ずいぶん」は50にもある。程度のはなはだしいことを示す副詞である。「心配」は，悪い結果や悪いことが起こることを気にして，あれこれ心を悩ますことであって，ここのように「する」を伴って漢語のサ変動詞となることもあり，「心配が絶えない」のように名詞ともなり，また「心配な空模様」のように形容動詞ともなる。「心配する」は他の漢語サ変動詞と同じように間に「を」を入れて「心配をする」とも言い得る。88では，「です」を使っているが，ここではインフォーマルな「わ」を取っている。真理子に言う形をとっているためもあるが，このように非難を示すときは，身内に対

してもやや丁寧になることがある。こうして，二つのスタイルがここで両方あらわれたのであろう。

⑳の「ごめんなさい」は謝罪のことば。許しを求めて「なさい」と「なさる」の命令形を使って願う形をとる。

㉑の「岬」は広い水の面に突き出た陸地の特に先の方。「半島」はもっと大きいし，また必ずしも先端ではない。「行っている」については⑱を見よ。

㉒「〜をしている人がいた」は，いろいろに応用のきく文型である。「いた」と過去になっているのに合わせて「〜をしていた人」とここも過去にするともうそのときは完了になってしまうから，「つりをしている」にはあまり適当ではない。「つりをしていた人がいる」もこの場合適当ではない。「赤い着物を着た人がいる」のように，着るという動作が終わってその結果が残っているようなときは可能である。

㉓のように言うときは，何かが連続してつれているということを想像している。相当のいわゆる釣果のあったことを期待した言い方である。

㉕は，⑭の「くも？」とほとんど同じであるが，⑭の言い方よりは驚きの度合いも低く，不審の度合いが高いようである。

3.　この映画の学習内容のまとめ

この映画の学習内容の主なものは可能表現である。これを中心として以下考えてみることにする。

3.1.　可能の表現

可能表現としては，例えば，日本語教育指導参考書７「中・上級の 教授法」（1980　国立国語研究所）では，大略次のように述べている（この項，執筆は水谷信子氏）。

文法事項としては，「行ける，読める」「起きられる，見られる」のような「エル」，あるいは「れる／られる」に終わる活用形の問題であるが，なお，

可能表現として考えるべきものがある。「買う」ことの可能；不可能をあらわす表現を例として挙げると次のようなものがある。

1. 買える，買われる；買えない，買われない
2. 買うことができる；買うことができない。
3. 買い得る；買い得ない
4. ―――；買うわけにいかない
5. ―――；買い切れない
6. ―――；買いようがない

4.～6.は不可能だけであるが，他に「買う余裕がない」「買うだけの力がない」などさまざまな表現があり得る。このあとから追加した言い方については，不可能だけでなく可能表現もできる。

これらのうち，映画では，初級のための項目として1. と2. とを挙げている。この二つを主としてここでは取り上げ，次いでその他の表現について考えることとする。

3.1.1. 可能動詞と「れる／られる」

(1) 可能動詞

②の「泳げます」の「ます」でない形は「泳げる」で，これは「泳ぐ」の可能動詞である。

可能を示す動詞のうちで，特にいわゆる五段活用動詞の終止形の最後の -u を -eru と変えたものを「可能動詞」という。「泳ぐ」は五段活用の動詞であるので，「泳げる」は可能動詞である。可能動詞は下一段動詞の活用をする。

この映画では初出順に，

「泳げる」②③⑤⑦㉒㉝㊿52 55
「行ける」⑯
「取れる」㊹
「つれる」82 83 87 93 94
と合計16回出ている。

可能動詞は，その主体がその動作をする能力があることを示すのが第1の意味・用法である。これは「泳げる」「行ける」で典型的に例示される。恒常的，臨時的両方に使われる。「泳げる」は恒常的，「きょうは天気がいいから「行ける」は臨時的である。

可能動詞の第2の意味・用法は，その動作が許容されることを示すことである。この例はこの映画にはないが，「泳げる」も，「この池では泳げますか」は文脈によっては水泳が許されているかどうかを示すものである。「あと三日は待てる」などがこれである。広く言えば，その実現を可能にする性質や状況が具わっていることを示す。

第3の意味・用法は，自然にそうなるといういわゆる自発である。「泣けてくる」の「泣ける」はこれであるし，「そうとしか思えない」の「思える」もこれである。この例もこの映画にはないが，「つれる」は㉜のところで述べたように純粋の可能というよりは，少し自発寄りであるが，もとより純粋の自発でもない。つっているとどんな魚がかかるのかということである。いわば，ある場の状況から，あることが実現することが認められる，という意味である。「この道を行けば家に帰れる」もこの類であろう。

「泳ぐ」「行く」は自動詞であるから問題ないが，「取る」は他動詞であるので，「を」を取るがこれが可能動詞となるときのことを述べておく。「を」を取る対象語は「が」を取ることが多いが，この場合も，この「が」は主格を示すのではない。例えば「穀を取る」であれば「穀が取れる」である。「を」のままで残る場合もある。「ぼくは」が主語とすれば，「ぼくは穀が取れる」と主語はそのままである。また，この「は」は「に」となることもある。「ぼくに穀が取れる。」「ぼくに読めるかな。」この場合は「に」を取って「ぼくに」も対象語となるから特別な構造を取ることになる。

すべての五段活用動詞に可能動詞が可能ではない。例えば「わかる」には可能表現はないし，また，状態を示す動詞には通常ない。例えば「ある」など。

無生物を主語にした使い方はしないが，これについては次の「れる／られ

る」の項で述べる。

なお，可能動詞には命令形はない。

(2)　「れる／られる」

可能動詞の外に，動詞未然形に，五段活用では「れる」，その他の動詞では「られる」という助動詞をつけて可能を示すことができる。

映画では，

「食べられる」㊵㊻㊼㊽

「こられる」㊿

と5回あらわれている。

この「れる／られる」は，

1.　可能をあらわす。

2.　自発をあらわす。

3.　受身をあらわす。

4.　尊敬をあらわす。

というように多義であり，このうちのどれであるかは，文脈によって判断することになる。1と2とは似ているからここで一括して扱うことができるが，3，4は全く別語である。

「れる」は五段活用の動詞につくと上に述べたが，これは主としてこの3，4に関したことであって，1の可能を示す場合は，可能動詞を使うのが普通である。2の自発を示す場合は，可能を示す場合ほどではないが，可能動詞の形を使うことがある。2もまた広義の可能を示すものであり，これについては後に述べる。1の意味で五段活用の動詞につくのは限られたものである。例えば，

「ゆく」―「ゆかれる」

「いく」―「いかれる」

「寝付く」―「寝付かれる」

など。これらに「ゆける」「いける」「寝付ける」などと可能動詞がないわけではない。しかし「ゆける」「いける」などは，酒を飲むことができる，

うまい，などと「行く」とは関係の薄い意味を新しく得ている。

「られる」はこれに対して広く，上一段活用，下一段活用，カ行変格活用の動詞の未然形につくほか，サ行変格活用をする動詞「する」のうち，語幹が漢字1字で表記される漢語であるもの，語幹が2音節以下の和語であるもの，および「重んずる」のように語幹が撥音で終わる和語であるものの未然形につく。例は，上に一つずつあげた順に「起きられる」「食べられる」「こられる」(67)「擬せられる」「ものせられる」「かろんぜられる」などがある。このうち，「かろんぜられる」は「かろんじられる」ともいうが，これは上一段活用と二つあり，この方は上一段活用の未然形に「られる」のついたものである。また「愛する」は「愛せる」と可能動詞を作るが，これは，「愛す」という五段活用の動詞となっているものから作られたものである。「愛せられる」も可能として言わないことはない。「信ずる」も「信ぜられる」もあるが，なお「信じられる」という上一段活用からの転用もあるのである。「うとんじられる」もまた一般に使われる。

先に自発を広義の可能に入れておいたが，これは可能が，主体に能力があって積極的にできる意味をなすのに対して，その主体にあまり能力はなくても，周囲の状勢から自然にそうならざるを得ないものが自発であって狭義では区別する。これはまた，能力可能と状況可能との問題でもあるので後に一括して述べることにする。

可能動詞のところでも述べたように，「られる」にもつけられない動詞がいくつかある。

まず，状態をあらわす動詞には普通はつかない。「そびえる」などがこれである。「やせる」にはつくが，「やせている」にはつかない。

また，主体の能力に関係があるため，無生物を主語にした動詞的な使い方では普通にできない。これは可能動詞についても同様である。「水が流れられる」「太陽が昇れる」などは使えない。「とける」も「れる／られる」がつかないのは，一つには主語がいつも無生物になるからであろうか。

可能の意味を持つ動詞にさらに可能を示す助動詞はつかない。したがって

可能動詞にさらに「られる」はつかないし，「できる」に「られる」はつかない。「見える」「聞こえる」も可能を示しているとも考えられ，「られる」はつかない。この「見える」「聞こえる」は，また状態をあらわす動詞とも考えられる。

その他多くのことについては上の可能動詞のところで述べたことがそのまま言える。

(3)「起きれる」「見れる」について

「起きる」「見る」「分ける」「くる」などは，五段活用の動詞ではないから，「られる」をつけて「起きられる」「見られる」「分けられる」「こられる」となるはずである。しかし，これらを「起きれる」「見れる」「分けれる」「これる」などと言う人が多くなってきた。この問題について考えてみよう。

これに関しては，国立国語研究所報告70の「大都市の言語調査」に東京および大阪における調査の結果とその考察が出ている。これを簡単にまとめてみよう。

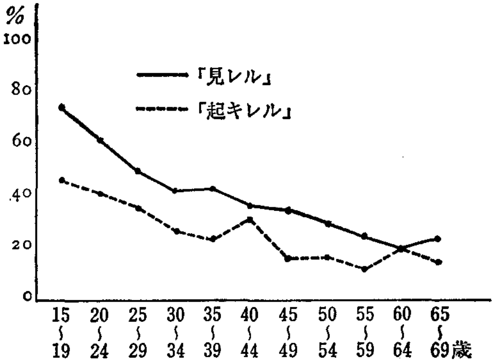
東京でこの言い方が話しことばで使われ始めたのは昭和初期であり，第2次大戦以後は書きことばにもあらわれたとされている。これは最初は1音節語の否定形「見レナイ」「来レナイ」などから始まり2音節語に及んだといわれている。

調査は「見る」「起きる」について行って，「見れる」などを「見られる」などと同等かそれ以上使っているとき「見れる」を使ったものとして処理した。

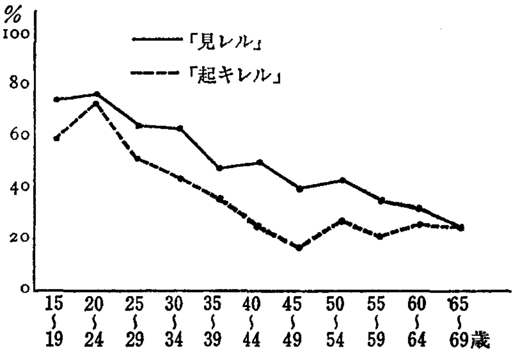
全体としては，東京よりも大阪の方が被調査者全体に占める「～レル」の形の使用率が高く，また，東京・大阪とも「見れる」の方が「起きれる」よりも使用率が高い。

どの場合も男性の方が女性よりも「～レル」の使用率が高い。男女差の度合は，東京・大阪ともに「起きれる」の方が大きい。

年齢差については，次の図のように，東京・大阪とも若い人ほど「～レル」



「見レル」「起キレル」の使用率(東京)(年齢別)



「見レル」「起キレル」の使用率(大阪)(年齢別)

を多く使う傾向がある。低かった東京でも「見れる」については20代から下は50%を突破しており，この言い方が極めて近い将来に，日本語の多数を占めることはまず間違いない。今のところこの形は標準形とは認められていないが，そろそろ少なくとも許容形として認知してもいいのではないかと思われる。

この言い方は東京では，それ以外の関東出身者，大阪では，それ以外の近畿出身者で「～レル」の形が少ないところから，両都市とも本来の形とは言えないようである。それよりもっと多くの地方からそれぞれの都市に移ってきた人によって拡がった言い方ではないかと思われる。あまり調査地点密度は高くないが，全国的調査では，中部地方，中・四国地方にこの言い方が多いようである。

このように方言的なものから出発したのではあろうが，この形は，五段活用から可能動詞を作る形に類推して，非常に自由に使われている。二つの方則を覚えるよりも，一つにしてしまった方が合理的と考えられるところもあり，ますます多くなり，全体としては，「見れる」「起きれる」では，先に述べた調査では大阪の「見れる」だけが半数を超えているだけであるが，近い将来は，東京でも多数を制するのではないかと思われる。

3.1.2. 「できる」について

(1)「～は～ができる」

「れる／られる」のところでサ行変格活用の一部を除外した。除外されたのは，語幹が2字以上の漢字で表記されうる漢語であるもの，語幹が外来語・擬音語・擬態語であるもの，および語幹が3音節以上の和語で，語幹の末尾が撥音でないものでは，「する」の部分を「できる」にかえて可能を示す。

例をあげると，「勉強する」～「勉強できる」「カーブする」～「カーブできる」「コロコロする」～「コロコロできる」「いたずらする」～「いたずらできる」など。

この「できる」は，森田良行「基礎日本語」(1977　角川書店)に詳しい記述がある。これによれば，「できる」は「出(い)で来(く)」で新しい事物が出てくる，“生ずる”の意であり，事物の「出来(しゅったい)」が「できる」の基本義であるという。

「基礎日本語」では，「できる」を，

1. 「～ガできる」
2. 「～ニ～ガできる」
3. 「～ハ～デできる」

4. 「～ハ～ガできる」

の四つに分けて分析している。4. が可能に関係がある。「できる」の主体を「は」で立てて，ある新しい現象を生み出すことを何か（主体）が行う状態にある，の意味となる。その主体はあることを行う能力や資格を持っている。「私は何でもできる」「子どもは一人で映画館に入ることはできない」「彼女はドイツ語ができる」。

同じ「食事の支度ができる」でも「～ができる」では「食事の支度ができました」は完成・完了の意味となって「～ハ～ガできる」とは違う。

行為・事柄が可能だという能力の所有は，さらに，一般が持たない能力を有する，優れている，上手だ，などの意味に転じる。「彼はよくできる」「よくできた人だ」など。（以上，同書310ページ）

なお，この「できる」を漢語のあとに使うと，上の可能動詞や「れる／られる」では使えなかった可能表現が可能となる。たとえば，「わかる」は「理解する」とすれば「理解できる」と言うことができる。同様に「ある」「いる」—「存在できる」「そびえる」—「屹立（きつりつ）できる」など。

「～ガできる」については日本語教育映画解説8「どちらがすきですか」の35ページに久野暲「日本文法研究」では，意味上目的格の「ヲ」が期待されるところに「が」のあらわれる構文のd）にあげてあることが述べてある。

(2)「～することができる」

「～ガできる」の一つの形として，ガが明らかな体言の形として「こと」を受け，その「こと」にかかる連体修飾語の一つとして，動詞連体形をとるという構文である。映画では⑱㉑に「泳ぐことができる」という形であらわれている。

この形は，今までで説明したこの映画の可能表現の多くのものに適用できる。「泳げる」に対しては上の「泳ぐことができる」などで，「行ける」—「行くことができる」，「取れる」—「取ることができる」，「食べられる」—「食べることができる」，「こられる」—「くることができる」などである。

しかし，「つれる」を「つることができる」とこの文脈で言えるかどうかは疑問である。すなわち，純粋の能力ではない場合，自発的な意味合いが入ると使えないのである。

「する」の位置には多くの動詞が入ることができるが，また，ここには入れることのできない動詞もある。可能動詞など，可能をあらわすものは入り得ないのが普通である。また，上に述べた，可能動詞や「れる／られる」の使えない動詞は，入れにくい。たとえば「わかることができる」は無理に言えないこともないが，少々不自然である。

可能動詞なり「れる／られる」なりを使った形と「～ことができる」の形とは，上に述べたように自発を後者がとらないことを除いてはほとんど変わりはない。幾分「～ことができる」の方が強調的な感じがすることはある。「わたしは英語は話せないが，フランス語は話すことができる」「わたしは英語は話すことはできないが，フランス語は話せる」の間にはほとんど差はない。

一説には「スペイン語は話すこともできる」の示す，スペイン語は読むこと，書くことができその上さらに話すこともできる，の意味は「話せる」ではあらわせないという。しかし「話せもする」まで拡張すれば可能である。他の言語は読み書きだけできるのに対してスペイン語は話すこともできる，ということになる。

3.1.3. その他の可能表現

(1)「～得る」

先に述べた「中・上級の教授法」に述べられていた，3. の表現である。

これは，この映画にはあらわれていない。「～」のところには，いわゆる連用形がくる。「わかり得る」「あり得る」などと，可能動詞を作れなかったり，「れる／られる」を取れなかったりした動詞もこの形を取ることが不可能ではない。

「得る」は現代語でも「ウル」と発音することがあるが，これは未然形が「エない」であるから下二段活用となってしまい，古い形の化石形というこ

とになろう。したがって，一段活用として「エル」と発音するのが標準的と言えるであろう。やや改まった古い言い方であって，強調形としては使われるが，日常会話にはあまりあらわれない。これはさらに「十分あり得ること」「絶対起こりえない」などと，当然のこととしてある事態を予測する場合にも使われる。

(2)「〜わけにいかない」など

これは「中・上級の教授法」に出ている可能表現の4〜6である。ここでは，例として「買うわけにいかない」「買い切れない」「買いようがない」などで，不可能の方だけである，とされている。しかし，「買い切る」は方言形としては，あとで述べるようにあり，「買いようがない」に対しては，「前からその競売のことがわかっていれば，買いようがあったのに」などと可能の言い方がないわけではない。

「買う余裕がない」「買うだけの力がない」などについては既に述べた。

(3)「見える」など

この映画では64に「見える」が出てきた。この「見える」も可能表現の一つである。他に「聞こえる」などもある。「見られる」「聞ける」との違いは，「見える」「聞こえる」が，意志欲求を抱いた場合に，見る，聞くを実現することが可能な条件が整った状況に身を置くことができるかどうかを問題にするのに対して，これらが，それを可能だと認識される状況にあって，当人が現実にこれを実現するかどうかを問題にしている，とされる。当人の意志にかかわりなく，自然に何かが目に入ったり耳に達したりすると「見える」「聞こえる」となり，当人の感覚器に欠陥があったり，何かに妨げられたりすれば，「見えない」「聞こえない」状態となる。たとえば「建物が建って富士山が見えなくなった」「年をとって耳が聞こえなくなった」など。

このシリーズ14「なみのおとが きこえてきます」の㊲㊳㊴に「見える」，64 65「聞こえる」が出ている。それぞれの解説を見よ。

(4)「〜ようになる」

なお，「〜ようになる」についてつけ加えておこう。

この映画で㉝㊿㊺では「泳げるようになる」は「泳げる」が可能動詞であるから，その動作が可能である状態になることを示しているのである。しかし「泳ぐようになる」も，それまでは泳がなかったのが，泳ぐという動作をするようになったということで可能を示す場合もある。しかし，たとえば「ようやく大正になって日本人もレジャーとして海岸で泳ぐようになりました」は言うまでもなく可能を示してはいない。

「泳げるようにする」はそのような能力を得させるという意味であるが，「泳ぐようにする」は可能である率は少なくなり，「泳ぐようにして下さい」は他人に対してすすめているときは可能ではない。二人称に対して「(わたしを）泳ぐようにして下さい」は可能となる可能性もないではないが，何やら他人事のようである。㉕は㉕′「体を，こうたてて，泳ぐようにして下さい」と言ってもいい。これはもちろん可能表現ではない。㉛′「もう少し，大きく手をかくようにして下さい」など。

3.1.4. 能力可能と状況可能

日本語の諸方言の中には可能表現について，能力可能と状況可能とを区別するものがある。

能力可能とは，今まで述べてきたような，能力が身に備わっている（いない）ということについての表現およびその形式であり，状況可能とは，それが可能な状況が整っている（いない）ということについての表現およびその形式である。「泳ぐ」については「ぼくは泳げる（泳げない)」が前者で「波がないのできょうは泳げる（波が高いのできょうは泳げない)」は後者である。

標準日本語（東京語も）はこれを区別しないが，方言によっては次のように区別をしている。（国立国語研究所報告70「大都市の言語生活」による）

	能　力	状　況
東　北	ヨマレル（ヨメル）(肯定) ヨマレネ（ヨメネ）(否定)	ヨムニイー（肯定) ヨマレネ（ヨメネ）(否定)

近畿・中国・四国	ヨーヨム（肯定） ヨーヨマン（否定）	ヨマレル（肯定） ヨマレン（否定）
九州東北部	ヨミキル（肯定） ヨミキラン（否定）	ヨマルル（肯定） ヨマレン（否定）
九州北西部 （佐賀・長崎附近）	ヨミユル（肯定） ヨミエン（否定）	ヨマルル（肯定） ヨマレン（否定）

東北地方では肯定のときだけ区別する。なお，近畿を中心とする地方では，上の他，ヨメル・ヨメヘンのような可能動詞が区別なく使われ，さらにヨマレル，ヨマレヘンなどが状況可能力ばかりでなく，能力可能について使われることも少なくない。すなわち，近畿などでは区別があいまいになりつつある。おそらくこれは近畿地方だけでなく標準語における状況に合わせて考えると，日本語全体で区別をしない方向へ動いていると思われる。

3.2. 可能を表す言い方にかかわる副詞（句）

この映画では可能表現にかかる副詞としては次のものがある。

「こんなに」㊵

「ずいぶん」⑤㊿。（なお，89は可能表現にはかかっていない。）

「ほとんど」⑦

「もう」58

それぞれの項目を見られたい。

この映画に出てきた副詞で，ここでは可能表現にかかっていないけれども，かかり得るものとしては，

「きっと」55

「こう」㉕

「すこし」㉓

「なかなか」⑯

などがある。「きっと泳げる」「こう泳げる」「すこし泳げる」「なかなか

泳げない」などである。これらは，はじめのものも含めて，可能・不可能両方に使えるものである。

「すこし」は，㉓では「少しです」で，これは「少し（泳げるだけ）です。」の省略形と見ることもできる。

副詞は広くいって連用修飾語の一部であるが，さらに連用修飾語にはいろいろのものがある。

まず，形容詞・形容動詞の連用形がある。この映画に出てきた形容詞では，「いい」の「よく」，「うまい」の「うまく」，「すごい」の「すごく」などがある。この映画に出てきた形容動詞では「上手に」「へんに」「簡単に」があり，「上手に」は⑱㊺で，「簡単に」は㊹で可能表現とともに出てきた。

㉝の「前より」，㊻の「全部」など，純粋な副詞ではないものも，連用修飾語としてここでは可能表現にかかっている。また「だれも」なども可能表現にかけることができる。「だれもあの海では泳げない。」など。

3.3. その他の主な学習事項について

もちろんすべてが学習事項ではあるが，この映画で取り上げるべき重要事項を簡単に列挙しておこう。

(1)「～てみる」

㉗㉘62 70にあらわれる。「～てみる」は「～を試みる」ということであって「見る」ではない。「見る」は62の近くでは64に「つりをしている人が見えるでしょう。」とあり，62の「向こうまで行ってみましょうよ。」と対している。実質的な方の「見る」を本動詞といい，形式的な方の「～てみる」を補助動詞という。

(2)「～やすい」「～にくい」「～すぎる」

「～やすい」「～にくい」はこの動作が前者は容易である，後者は困難である，と判断されることを示す。「～」のところには動詞連用形や動詞型の助動詞の連用形がくる。前者は㉖「息がしやすい」，㊺「食べやすい」，後者は㉔「息がしにくい」，㊸「食べにくい」となっていて，いずれも困難だと

いうことが，こうすれば容易になるという形で提示されている。助動詞のきた例は，「殺されにくい」「考えさせやすい」など。

この容易・困難は，もう少し極端になると可能・不可能となる，という点で，可能表現の周辺としてここで取り上げたのである。

「〜すぎる」は，程度またはその行動が過度であることを示す。「〜」の部分は形容詞・形容動詞の語幹，または動詞連用形，動詞型，形容詞型の助動詞の連用形である。前者の場合は程度について言っており，この映画では㊾「多すぎます」，㊻「遠すぎます」であり，後者はその行動が過度であると言っており，㊿「食べすぎ」がこれである。形容動詞の例は「貧弱すぎる」などがある。助動詞のついた例に「期待を持たせすぎる」「ちょっと女らしすぎる」など。なお形容詞「ない」のときは「すぎる」との間に「さ」を入れて「なさすぎる」とするが，助動詞「ない」の場合に「さ」を入れることはない。例えば「欲がなさすぎる」に対して「欲しがらなすぎる」。

過度ということばでわかるように，批判する，あるいは少なくとも批評する立場での発言が主なので，いい状態について言うのは普通ではない。「よすぎる」はこの意味であまり使わないが，「調子がよすぎる」などは批判の立場でそう変ではないし，「よすぎるというのも恐ろしい」とか使わないわけではない。

(3)「〜するといい」

「〜する」のところに用言や助動詞の終止形がくる。この映画では⑧「練習するといい」，⑩「習うといい」，㉕「泳ぐといい」，㉛「大きく手をかくといい」がある。どれも，そうすることが望ましい，そうするとうまくいく，の意味をあらわしている。このように，この映画では動詞だけがきているが，上に書いたように用言を受けるので，形容詞・形容動詞も受けることができる。「美しいといい」「綺麗だといい」など。動詞のときに勧める意味が強いが，形容詞・形容動詞のときは願望の意味が強くなる。

(4)「〜ながら」

同時進行を示すもので，この映画では㉚㊽に出ていて，これは既に2.2.2.

のそれぞれの項で説明した。これらを参照されたい。動詞や動詞型助動詞の連用形「～」のところに入る。

ここでは純粋の同時進行についてだけ学習する。「貧乏ながら幸福だ」「知っていながら嘘を言う」などの「ながら」はこれと縁辺のものであって状態を示すものが多いが，ここでは述べない。

(5)「～じゃないですか／～じゃないの」

「～じゃないですか」は㉒，「～じゃないの」は㊿に出てくる。㉒の方は可能動詞を受けている。このように可能動詞でなくても「(泳がないと聞いていたのに）泳ぐじゃないですか」と普通の動詞の終止形がくることもできる。

「(赤いと聞いていたのに）黒いじゃないですか」と形容詞も同様に終止形を受けるが「(真赤と聞いていたのに）真黒じゃないですか」と形容動詞では語幹を受ける。また「(洋食と聞いていたのに）和食じゃないですか。」と体言，「(少しと聞いていたのに）ほとんどじゃないですか。」と副詞などを受けることもできて大変広く使われる。

どれも意外感をもって，念押し，詰問などある質問を示す。

㊿で「～じゃないの」では「～」は「食べすぎ」で，これは動詞の連用形からの転成名詞と考えることができる。

㉒で「泳げるじゃあないですか」と言い，㊿で「食べすぎじゃないの」と言っている文体上の差は，㉒が他人に対してであるのに対して㊿が姉から相当年下の弟へのことばだからである。

4.　練習問題

主な学習項目に関する練習例を少しばかりあげておく。学習者の資質・能力等を考慮し，学習状況に適したものをこれを参考にして作られたい。

A　可能動詞に関するもの

A－1　例のように可能動詞を作ることができるものについて作りなさい。

〔例〕 早く泳ぐ→早く泳げる

早く起きる→「起きる」は一段活用なので可能動詞は作れない。

a．うまく書く　b．上手に立てる　c．暗くても読む　d．よくわかる　e．一人で洋服を着る　f．上手に遊ぶ　g．いつまでも待つ　h．暗いから行かない　i．早く読むようになる

A－2　例で示すように可能動詞で言いかえなさい。

〔例〕 本を読む→本が読める

a．手紙を書く　b．公園を歩く　c．舟を漕がない　d．舟を漕いだ　e．日本の新聞を読まない　f．日本の新聞を読んだ

B　「れる／られる」に関するもの

B－1　例のように「られる」をつけて可能をあらわす形を作りなさい。

〔例〕 起きる→起きられる

a．食べる　b．食べない　c．着物を着る　d．賞を受けた　e．彼を信じる　f．早く来た　g．軽んじる　h．一率に論じない　i．植える

B－2　次の動詞のうち，「られる」をつけて可能を示すことのできないものはどれですか。

a．愛する　b．思える　c．立てる　d．勉強する　e．見える　f．見る　g．騒ぐ　h．省みる　i．敗ける　j．太っている　k．言い切る　l．山が聳(そび)える

C　「できる」について

C－1　「ことができる」ではなく，「できる」を使って例のように可能を示す語形を作りなさい。

〔例〕 運動する→運動できる

a．勉強をする　b．勉強をした　c．練習する　d．練習した　e．参加する　f．参加した

C―2　上のA―1，2，B―1，2で問題としたものについて「～ことができる」の形が使えないものはどれか答えなさい。

D　能力可能と状況可能

D―1　次のものは能力可能を示すものであるか，状況可能を示すものであるか。

a．そんなに小さい声では聞こえない　b．暗くても暗くなくても読めない　c．鳥は空がとべる　d．夜でも飛べる　e．暗くて読めそうにもない　f．暗くても読むことができる

E　可能表現にかかる連用修飾語について

E―1　次の連用修飾語を使って，例にならって，可能および不可能を示す短文をそれぞれ一つずつ作りなさい。

〔例〕 「もう」→「もう泳げるようになりました」～「四時半になるともう読めなくなるくらい暗くなります」

a．ほとんど　b．こんなに　c．ずいぶん　d．よく　e．立派に　f．前から　g．悪く　h．静かに　i．どう

F　「～てみる」について

例にならって，「～てみましょう」をつけて言いなさい。

〔例〕 泳ぐ→泳いでみましょう。

a．泳ぎを習う　b．つりをする　c．あそこまで行く　d．練習する　e．ラーメンを食べる　f．あの岩まで泳ぐ　g．ようすを見る

G 「～やすい」「～にくい」について

次の動詞を使って「～やすい」「～にくい」の形を作り，それを使って短文を作れ。

a．作る　b．寝る　c．研究する　d．来る　e．切る　f．愛する　g．待つ　h．認められる　i．納得させる

H 「～すぎる」について

次のことばを「～すぎる」の形にしたうえでこれを使って短文を作りなさい。

a．美しい　b．綺麗だ　c．学者らしい　雨が降る　d．なぐられる　e．勇気がない　f．学校に行かない　g．待つ　h．考える　i．赤い　j．静かだ

I 「～するといい」の形について

次のことばを「～するといい」の形にしたうえで短文を作りなさい。

a．黒い　b．勉強する　c．信じる　d．水がのめる　e．丈夫だ　f．殺される　g．試験がない　h．心配ない　i．書く　j．ブラブラする

J 「～ながら」の形について

同時進行の「ながら」を次のことばについて，前，後ろにつけて，それぞれ一つずつ短文を作りなさい。

a．寝る　b．旅行をする　c．丈夫である　d．赤くなる　e．撃たれる　f．水を飲む　g．いそいで書く

5. 参考文献

ごく簡単にあげるにとどめる。

国際交流基金　1980　『教師用日本語教育ハンドブック④　文法Ⅱ，助動詞を中心にして』(阪田雪子・倉持保男執筆)

国立国語研究所　1980　『中・上級の教授法』(水谷信子執筆の部分)

——————　1981　『大都市の言語生活』(佐藤亮一執筆の部分)

鈴木重幸　1972　『日本語文法・形態論』　むぎ書房

永野　賢　1958　『学校文法概説』　朝倉書店

中村通夫　1953　『「来れる」「見れる」「食べれる」などという言い方についての覚え書』(金田一博士古稀記念『言語・民俗論叢』)　三省堂

文化庁　1975　『ことばシリーズ3，言葉に関する問答集1』

森田良行　1977　『基礎日本語——意味と使い方』　角川書店

その他，『国語学辞典』『国語学大辞典』『日本文法大辞典』などの辞典類。

資　料

資料1.　使用語彙一覧

これは，この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様，教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな，かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し，そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については，初級日本語教育の立場に立っている。
   2.—1.　接頭辞「お」や，接尾辞「さん」「ふん(分)」は，見出し語として取り上げている。ただし「おにいさん」や，「おねえさん」等は，そのまま見出し語に立てている。
   2.—2.　数詞は，助数詞と切り離して見出し語に立てている。
   2.—3.　動詞は，終止形を見出し語にしている。サ変複合動詞は，「する」を切り離して二語扱いにしている。
   2.—4.　形容動詞は，「＿＿な」の形を見出し語にしている。
   2.—5.　「です」に前接する「ん」は，一語扱いにして見出し語にしている。
   2.—6.　「こうすると」「じゃない」「なーんだ」等は，一語扱いにして見出し語にしている。
   2.—7.　「ごちそうさま」等，慣用的表現として扱ったものは，そのまま見出し語にしている。
   2.—8.　接続助詞「て」は，ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。
3. 見出し語の語義，活用変化，他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には，(1)(2)……のようにした。
   3.—1.　助数詞の違いによって数詞の発音が異なる場合は下位分類した。
   3.—2.　動詞は，まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大

きく二分した。((本動詞の場合))「ます」形であるか，「____て」等の形であるかで下位分類し，また常体での言い方は，一語扱いにして別の分類にした。((補助動詞の場合)) 補助動詞が違えば下位分類してある。ただし，その意味・用法の違いによる下位分類はしていない。

3.—3.　「です」は，それに伴う終助詞の種類，また「です」か「なんです」であるかにより下位分類してある。

3.—5.　助詞「か」「が」「に」「の」等は，その意味，用法によって下位分類してある。

4.　「ます」「ません」「ました」については文例の列挙を省略し，文番号だけを示した。「ましょう」は省略していない。

5.　使用文例の文頭には，①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり，この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では，この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも，その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ，引用を一回ですませた。

6.　見出し語の横には〔　〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し，またその横には（　）で語の使用回数を示した。

あがる〔上がる〕(1)

㉖ かおが**あがって**，いきがしやすいです。

あきら〔明〕(4)

② **あきら**くんは，およげますか。

⑭ ね，**あきら**くん。

⑱ **あきら**くんは，なかなかじょうずにおよぐことができますね。

㊿ **あきら**，たべすぎじゃないの。

あし〔足〕(2)

㉚ てをかきながら，**あし**をあわせます。

75 **あし**が。

あそこ(3)

③ **あそこ**のいわぐらいまでは，およげます。

65 **あそこ**まで。

67 **あそこ**までいって，にじっぷんやさんじっぷんでもどってこられません。

あっ(2)

(1)76 **あっ**。

(2)㊻ **あっ**，ぜんぶはたべられませんよ。

あの(2)

① ほら，**あの**うみですよ。

91 **あの**みさきまでいっていました。

ある(1)

85 ほら，くもが**ある**でしょう。

あわせる〔合わせる〕(1)

㉚ てをかきながら，あしを**あわせ**ます。

いい(5)

⑧ じゃあ，このきかいにれんしゅうすると**いい**ですよ。

⑩ おにいさんにならうと**いい**わ。

㉕　からだを，こうたてて，およぐと**いい**ですよ。

㉛　もうすこし，おおきくてをかくと**いい**ですよ。

㊲　もう，**いい**んですか。

いき〔息〕(2)

㉔　**いき**がしにくいんですね。

㉖　かおがあがって，**いき**がしやすいです。

いく「行く〕(6)

(1)⑬　じゃあ，わたしたちは，およぎに**いき**ましょう。

(2)67　あそこまで**いって**，にじっぷんやさんじっぷんでもどってこられません。

(3)91　あのみさきまで**いって**いました。

88　どこへ**いって**いたんですか。

(4)62　むこうまで**いって**みましょうよ。

70　**いって**みましょうよ。

いける〔行ける〕(1)

⑯　むこうのいわまで**いけ**ますか。

いただきます(2)

38 39　**いただきます。**

いっしょに(1)

㉟　さあ，むこうまで**いっしょに**およぎましょう。

いる(11)

(1)71　おかしいな，だれも**い**ませんよ。

(2)87　くもがつれて**い**ますね。

91　あのみさきまでいって**い**ました。

94　くもがつれて**い**ました。

(2)64　ほら，むこうにつりをして**いる**ひとがみえるでしょう。

92　つりをして**いる**ひとがいたんですよ。

(3)92　つりをしているひとが**い**たんですよ。

(4)⑱　ねむって**いた**んですか。

⑳　つりをしながら，ねむって**いた**んです。

⑱　どこへいって**いた**んですか。

㉝　なにがつれて**いた**んですか。

いわ〔岩〕(2)

③　あそこの**いわ**ぐらいまでは，およげます。

⑯　むこうの**いわ**までいけますか。

うまい(4)

㉙　そう，そう，**うまい**ですよ。

㉜　**うまい**，うまい，うまいですよ。

㉜　うまい，**うまい**，うまいですよ。

㉜　うまい，うまい，**うまい**ですよ。

うみ〔海〕(1)

①　ほら，あの**うみ**ですよ。

うん(3)

⑫⑮⑰　**うん**。

ええ(6)

⑨⑲㉞㊱⑲　**ええ**。

㊳　**ええ**，もう，たべられません。

えっ(2)

⑭　**えっ**。

㉞　**えっ**，くも？

おおい〔多い〕(1)

㊾　**おお**すぎますね。

おおきい〔大きい〕(1)

㉛　もうすこし，**おおきく**てをかくといいですよ。

おかしい(1)

⑪　**おかしい**な，だれもいませんよ。

おどろく〔驚く〕(1)

⑧① **おどろいたわ。**

おにいさん〔お兄さん〕(2)

⑩ **おにいさん**にならうといいわ。

⑪ ね，**おにいさん。**

おねえさん〔お姉さん〕(1)

⑥⑧ **おねえさん**がしんぱいしますよ。

およぎ〔泳ぎ〕(1)

④⑧ **およぎ**は，じょうずになりました？

およぐ〔泳ぐ〕(6)

(1)③⑤ さあ，むこうまでいっしょに**およぎ**ましょう。

(2)⑬ じゃあ，わたしたちは，**およぎ**にいきましょう。

(3)②⑧ さあ，**およいで**みてください。

(4)⑱ あきらくんは，なかなか，じょうずに**およぐ**ことができますね。

②① さあ，そこからここまで**およぐ**ことができますか。

(5)②⑤ からだを，こうたてて，**およぐ**といいですよ。

およげる〔泳げる〕(9)

(1)② あきらくんは，**およげ**ますか。

③ あそこのいわぐらいまでは，**およげ**ます。

⑤ ずいぶん，**およげ**ますね。

⑦ わたしは，ほとんど**およげ**ません。

⑤② もう，に，さんじゅうメートルは，**およげ**ますよね。

(2)②② **およげる**じゃあないですか。

③③ まえよりも，**およげる**ようになりましたね。

⑤⓪ ずいぶん，**およげる**ようになりましたよ。

⑤⑤ きっとじょうずに**およげる**ようになりますよ。

か(10)

(1)② あきらくんは，およげます**か。**

⑯　むこうのいわまでいけますか。

㉑　さあ，そこからここまでおよぐことができますか。

㊼　もう，いいんですか。

㊷　なにがつれますか。

㊸　どこへいっていたんですか。

㊾　なにがつれていたんですか。

(2)㉒　およげるじゃあないですか。

㊸　そうですか。

㊽　ねむっていたんですか。

が⒃

(1)㉔　いきがしにくいんですね。

㉖　かおがあがって，いきがしやすいです。

㉖　かおがあがって，いきがしやすいです。

㊷　ぼくがたべますよ。

68　おねえさんがしんぱいしますよ。

75　あしが。

82　なにがつれますか。

83　くもがつれますよ。

85　ほら，くもがあるでしょう。

87　くもがつれていますね。

92　つりをしているひとがいたんですよ。

93　なにがつれていたんですか。

94　くもがつれていました。

(2)64　ほら，むこうにつりをしているひとがみえるでしょう。

(3)⑱　あきらくんは，なかなか，じょうずにおよぐことができますね。

㉑　さあ，そこからここまでおよぐことができますか。

かお〔顔〕(1)

㉖　かおがあがって，いきがしやすいです。

かく(2)

(1)㉚　てを**かき**ながら，あしをあわせます。

(2)㉛　もうすこし，おおきくてを**かく**といいですよ。

から(1)

㉑　さあ，そこ**から**ここまでおよぐことができますか。

からだ〔体〕(1)

㉕　**からだ**を，こうたてて，およぐといいですよ。

かんたんな〔簡単な〕(1)

㊹　それはね，こうすると，**かんたんに**とれます。

きかい〔機会〕(1)

⑧　じゃあ，この**きかい**にれんしゅうするといいですよ。

きゃー(1)

㊸　**きゃー**。

きっと(1)

㊺　**きっと**じょうずにおよげるようになりますよ。

ください(1)

㉘　さあ，およいでみて**ください**。

くも〔雲〕(6)

83　**くも**がつれますよ。

84　えっ，**くも**？

85　ほら，**くも**があるでしょう。

87　**くも**がつれていますね。

94　**くも**がつれていました。

95　**くも**……。

ぐらい(2)

③　あそこのいわ**ぐらい**までは，およげます。

51　なんメートル**ぐらい**？

くる〔来る〕(1)

㊼ あそこまでいって，にじっぷんやさんじっぷんでもどって**こられません**。

くん〔君〕(3)

② あきら**くん**は，およげますか。

⑭ ね，あきら**くん**。

⑱ あきら**くん**は，なかなか，じょうずにおよぐことができますね。

こう(1)

㉕ からだを，**こう**たてて，およぐといいですよ。

こうすると(1)

㊹ それはね，**こうすると**，かんたんにとれます。

ここ(3)

㉑ さあ，そこから**ここ**までおよぐことができますか。

㊼ **ここ**と，ここしかたべられません。

㊼ ここと，**ここ**しかたべられません。

ごちそうさま(1)

㊽ **ごちそうさま**。

こと(2)

⑱ あきらくんは，なかなか，じょうずにおよぐ**こと**ができますね。

㉑ さあ，そこからここまでおよぐ**こと**ができますか。

この(1)

⑧ じゃあ，**この**きかいにれんしゅうするといいですよ。

ごめんなさい(1)

⑳ **ごめんなさい**。

これ(1)

㊸ **これ**，たべにくいですね。

こんなに(1)

㊵ わたし，**こんなに**たべられないわ。

さあ(3)

㉗　**さあ**，そこからここまでおよぐことができますか。

㉘　**さあ**，およいでみてください。

㉟　**さあ**，むこうまでいっしょにおよぎましょう。

さん(2)

⑥　なつこ**さん**は？

⑳　まりこ**さん**も，じょうずですね。

さんじゅう〔三十〕(2)

(1)52　もう，に，**さんじゅう**メートルは，およげますよね。

(2)67　あそこまでいって，にじっぷんや**さんじっ**ぷんでもどってこられません。

しか(1)

47　ここと，ここ**しか**たべられません。

じゃあ(2)

⑧　**じゃあ**，このきかいにれんしゅうするといいですよ。

⑬　**じゃあ**，わたしたちは，およぎにいきましょう。

じゃあない(1)

㉒　およげる**じゃあない**ですか。

じゃない(1)

60　あきら，たべすぎ**じゃない**の。

じょうずな〔上手な〕(5)

(1)⑳　まりこさんも，**じょうず**ですね。

(2)⑱　あきらくんは，なかなか，**じょうずに**およぐことができますね。

48　およぎは，**じょうずに**なりました？

49　まだまだ，**じょうずに**なりません。

55　きっと**じょうずに**およげるようになりますよ。

しんぱい〔心配〕(2)

68　おねえさんが**しんぱい**しますよ。

89　ずいぶん，**しんぱい**したわ。

ずいぶん(3)

⑤ **ずいぶん**，およげますね。

㊿ **ずいぶん**，およげるようになりましたよ。

89 **ずいぶん**，しんぱいしたわ。

すぎる〔過ぎる〕(3)

(1)59 おお**すぎ**ますね。

66 とお**すぎ**ますよ。

(2)60 あきら，たべ**すぎ**じゃないの。

すごい(2)

㊲ わあー，**すごい**なー。

54 それは，**すごい**ですね。

すこし〔少し〕(2)

㉓ でも，**すこし**です。

㉛ もう**すこし**，おおきくてをかくといいですよ。

する(8)

(1)68 おねえさんがしんぱい**し**ますよ。

(2)80 つりを**し**ながら，ねむっていたんです。

(3)㉔ いきが**し**にくいんですね。

㉖ かおがあがって，いきが**し**やすいです。

(4)64 ほら，むこうにつりを**して**いるひとがみえるでしょう。

92 つりを**して**いるひとがいたんですよ。

(5)⑧ じゃあ，このきかいにれんしゅう**する**といいですよ。

(6)89 ずいぶん，しんぱい**した**わ。

ぜんぶ〔全部〕(1)

㊻ あっ，**ぜんぶ**はたべられませんよ。

そう(3)

㉙ **そう**，そう，うまいですよ。

㉙ そう，**そう**，うまいですよ。

㊸ **そう**ですか。

そこ(1)

㉑ さあ，**そこ**からここまでおよぐことができますか。

それ(2)

㊹ **それ**はね，こうすると，かんたんにとれます。

㊺ **それ**は，すごいですね。

だ(1)

㊻ ほんと**だ**。

だいじょうぶな〔大丈夫な〕(4)

㊶ **だいじょうぶ**，だいじょうぶ。

㊶ だいじょうぶ，**だいじょうぶ**。

㊷ **だいじょうぶ**ですよ。

㊹ **だいじょうぶ**。

たち(1)

⑬ じゃあ，わたし**たち**は，およぎにいきましょう。

たてる〔立てる〕(1)

㉕ からだを，こう**たてて**，およぐといいですよ。

たべる〔食べる〕(8)

(1)㊷ ぼくが**たべ**ますよ。

(2)㊸ これ，**たべ**にくいですね。

㊺ ほら，**たべ**やすいでしょう。

㊿ あきら，**たべ**すぎじゃないの。

(3)㊵ わたし，こんなに**たべ**られないわ。

㊻ あっ，ぜんぶは**たべ**られませんよ。

㊼ ここと，ここしか**たべ**られません。

㊸ ええ，もう，**たべ**られません。

だれも(1)

㊦ おかしいな，**だれも**いませんよ。

つり(3)

⑭ ほら，むこうに**つり**をしているひとがみえるでしょう。

⑳ **つり**をしながら，ねむっていたんです。

⑫ **つり**をしているひとがいたんですよ。

つれる(5)

(1)⑫ なにが**つれ**ますか。

⑬ くもが**つれ**ますよ。

(2)⑰ くもが**つれて**いますね。

⑬ なにがつれていたんですか。

⑭ くもが**つれて**いました。

て〔手〕(2)

㉚ **て**をかきながら，あしをあわせます。

㉛ もうすこし，おおきく**て**をかくといいですよ。

で(1)

⑰ あそこまでいって，にじっぷんやさんじっぷん**で**もどってこられません。

できる(2)

⑱ あきらくんは，なかなか，じょうずにおよぐことが**でき**ますね。

㉑ さあ，そこからここまでおよぐことが**でき**ますか。

でしょう(3)

㊺ ほら，たべやすい**でしょう**。

⑭ ほら，むこうにつりをしているひとがみえる**でしょう**。

⑮ ほら，くもがある**でしょう**。

です(22)

(1)㉓ でも，すこし**です**。

㉖ かおがあがって，いきがしやすい**です**。

(2)㉒ およげるじゃない**です**か。

㊸ そう**です**か。

(3)⑳　まりこさんも，じょうずですね。

㊸　これ，たべにくいですね。

㊿④　それは，すごいですね。

⑦②　へんですねー。

(4)①　ほら，あのうみですよ。

⑧　じゃあ，このきかいにれんしゅうするといいですよ。

㉕　からだを，こうたてて，およぐといいですよ。

㉙　そう，そう，うまいですよ。

㉛　もうすこし，おおきくてをかくといいですよ。

㉜　うまい，うまい，うまいですよ。

⑥①　だいじょうぶですよ。

(5)㉔　いきがしにくいんですね。

⑤⑦　もう，いいんですか。

⑦⑧　ねむっていたんですか。

⑧⓪　つりをしながら，ねむっていたんです。

⑧⑧　どこへいっていたんですか。

⑨②　つりをしているひとがいたんですよ。

⑨③　なにがつれていたんですか。

でも(1)

㉓　**でも**，すこしです。

と(5)

(1)㊼　ここ**と**，ここしかたべられません。

②⑧　じゃあ，このきかいにれんしゅうする**と**いいですよ。

⑩　おにいさんにならう**と**いいわ。

㉕　からだを，こうたてて，およぐ**と**いいですよ。

㉛　もうすこし，おおきくてをかく**と**いいですよ。

とおい〔遠い〕(1)

⑥⑥　**とお**すぎますよ。

どこ(2)

⑬ **どこ**？

⑱ **どこ**へいっていたんですか。

とれる〔取れる〕(1)

㊹ それはね，こうすると，かんたんに**とれ**ます。

な(2)

㉑ おかしい**な**，だれもいませんよ。

㊲ わあー，すごい**な**ー。

なあーんだ(1)

㊆ **なあーんだ**。

ない(1)

㊵ わたし，こんなにたべられ**ない**わ。

なかなか(1)

⑱ あきらくんは，**なかなか**，じょうずにおよぐことができますね。

ながら(2)

㉚ てをかき**ながら**，あしをあわせます。

㊽ つりをし**ながら**，ねむっていたんです。

なつこ〔夏子〕(1)

⑥ **なつこ**さんは？

なに〔何〕(3)

(1)㊷ **なに**がつれますか。

㊾ **なに**がつれていたんですか。

(2)㉛ **なん**メートルぐらい？

ならう〔習う〕(1)

⑩ おにいさんに**ならう**といいわ。

なる(5)

(1)㊽ およぎは，じょうずに**なり**ました？

㊾ まだまだ，じょうずに**なり**ません。

(2)㉝ まえよりも，およげるように**なり**ましたね。

㊿ ずいぶん，およげるように**なり**ましたよ。

㊺ きっとじょうずにおよげるように**なり**ますよ。

に〔二〕(1)

52 もう，**に**，さんじゅうメートルは，およげますよね。

に(4)

(1)⑧ じゃあ，このきかい**に**れんしゅうするといいですよ。

(2)⑩ おにいさん**に**ならうといいわ。

(3)⑬ じゃあ，わたしたちは，およぎ**に**いきましょう。

(4)64 ほら，むこう**に**つりをしているひとがみえるでしょう。

にくい(2)

㉔ いきがし**にくい**んですね。

㊸ これ，たべ**にくい**ですね。

にじゅう〔二十〕(1)

67 あそこまでいって，**にじっぷん**やさんじっぷんでもどってこられません。

ね(2)

⑪ **ね**，おにいさん。

⑭ **ね**，あきらくん。

ね(13)

⑤ ずいぶん，およげます**ね**。

⑱ あきらくんは，なかなか，じょうずにおよぐことができます**ね**。

⑳ まりこさんも，じょうずです**ね**。

㉔ いきがしにくいんです**ね**。

㉗ やってみます**ね**。

㉝ まえよりも，およげるようになりました**ね**。

㊸ これ，たべにくいです**ね**。

㊹ それは**ね**，こうすると，かんたんにとれます。

㊷ もう，に，さんじゅうメートルは，およげますよ**ね**。

㊹ それは，すごいです**ね**。

㊾ おおすぎます**ね**。

⑫ へんです**ね**～。

㊼ くもがつれています**ね**。

ねむる〔眠る〕(2)

⑱ **ねむって**いたんですか。

⑳ つりをしながら，**ねむって**いたんです。

の(3)

(1)③ あそこ**の**いわぐらいまでは，およげます。

⑯ むこう**の**いわまでいけますか。

(2)⑳ あきら，たべすぎじゃない**の**。

は(11)

② あきらくん**は**，およげますか。

③ あそこのいわぐらいまで**は**，およげます。

⑥ なつこさん**は**？

⑦ わたし**は**，ほとんどおよげません。

⑬ じゃあ，わたしたち**は**，およぎにいきましょう。

⑱ あきらくん**は**，なかなか，じょうずにおよぐことができますね。

㊹ それ**は**ね，こうすると，かんたんにとれます。

㊻ あっ，ぜんぶ**は**たべられませんよ。

㊽ およぎ**は**，じょうずになりました？

㊷ もう，に，さんじゅうメートル**は**，およげますよね。

㊹ それ**は**，すごいですね。

ひと〔人〕(2)

⑭ ほら，むこうにつりをしている**ひと**がみえるでしょう。

⑫ つりをしている**ひと**がいたんですよ。

ふん〔分〕(2)

⑰ あそこまでいって，にじっぷん**やさんじっぷんでも**どってこられません。

⑰ あそこまでいって，にじっぷんやさんじっぷん**でも**どってこられません。

へ(1)

⑱ どこ**へ**いっていたんですか。

へんな〔変な〕(1)

⑫ **へん**ですねー。

ほーお(1)

④ **ほーお**。

ぼく(1)

㊷ **ぼく**がたべますよ。

ほとんど(1)

⑦ わたしは，**ほとんど**およげません。

ほら(4)

① **ほら**，あのうみですよ。

㊺ **ほら**，たべやすいでしょう。

㊽ **ほら**，むこうにつりをしているひとがみえるでしょう。

㊿ **ほら**，くもがあるでしょう。

ほんと(1)

⑯ **ほんと**だ。

まえ〔前〕(1)

㉝ **まえ**よりも，およげるようになりましたね。

ました(5) ㉝，㊽，㊿，㊁，㊄

ましょう(4)

⑬ じゃあ，わたしたちは，およぎにいき**ましょう**。

㉟ さあ，むこうまでいっしょにおよぎ**ましょう**。

㉢ むこうまでいってみ**ましょう**よ。

⑩ いってみましょうよ。

ます⒅ ②，③，⑤，⑯，⑱，㉑，㉗，㉚，㊷，㊹，52，55，59，66，68，
82，83，87

ません(7) ⑦，㊻，㊼，㊾，58，67，71

まだ(2)

㊾ **まだ**まだ，じょうずになりません。

㊾ まだ**まだ**，じょうずになりません。

まで(8)

③ あそこのいわぐらい**まで**は，およげます。

⑯ むこうのいわ**まで**いけますか。

㉑ さあ，そこからここ**まで**およぐことができますか。

㉟ さあ，むこう**まで**いっしょにおよぎましょう。

62 むこう**まで**いってみましょうよ。

65 あそこ**まで**。

67 あそこ**まで**いって，にじっぷんやさんじっぷんでもどってこられません。

91 あのみさき**まで**いっていました。

まりこ〔真理子〕(1)

⑳ **まりこ**さんも，じょうずですね。

みえる〔見える〕(1)

64 ほら，むこうにつりをしているひとが**みえる**でしょう。

みさき(1)

91 あの**みさき**までいっていました。

みる(4)

(1)㉗ やって**み**ますね。

62 むこうまでいって**み**ましょうよ。

70 いって**み**ましょうよ。

(2)㉘ さあ，およいで**みて**ください。

むこう〔向こう〕(4)

⑯ **むこう**のいわまでいけますか。

㉟ さあ，**むこう**までいっしょにおよぎましょう。

62 **むこう**までいってみましょうよ。

64 ほら，**むこう**につりをしているひとがみえるでしょう。

メートル(2)

51 なん**メートル**ぐらい？

52 もう，に，さんじゅう**メートル**は，およげますよね。

も(2)

⑳ まりこさん**も**，じょうずですね。

㉝ まえより**も**，およげるようになりましたね。

もう(2)

㉛ **もう**すこし，おおきくてをかくといいですよ。

52 **もう**，に，さんじゅうメートルは，およげますよね。

57 **もう**，いいんですか。

58 ええ，**もう**，たべられません。

もどる(1)

67 あそこまでいって，にじっぷんやさんじっぷんで**もどって**こられません。

や(1)

67 あそこまでいって，にじっぷん**や**さんじっぷんでもどってこられません。

やすい(2)

㉖ かおがあがって，いきがし**やすい**です。

㊺ ほら，たべ**やすい**でしょう。

やる(1)

㉗ **やって**みますね。

よ(19)

① ほら，あのうみですよ。

⑧ じゃあ，このきかいにれんしゅうするといいですよ。

㉕ からだを，こうたてて，およぐといいですよ。

㉙ そう，そう，うまいですよ。

㉛ もうすこし，おおきくてをかくといいですよ。

㉜ うまい，うまい，うまいですよ。

㊷ ぼくがたべますよ。

㊻ あっ，ぜんぶはたべられませんよ。

㊿ ずいぶん，およげるようになりましたよ。

52 もう，に，さんじゅうメートルは，およげますよね。

55 きっとじょうずにおよげるようになりますよ。

61 だいじょうぶですよ。

62 むこうまでいってみましょうよ。

66 とおすぎますよ。

68 おねえさんがしんぱいしますよ。

70 いってみましょうよ。

71 おかしいな，だれもいませんよ。

83 くもがつれますよ。

92 つりをしているひとがいたんですよ。

ように(3)

33 まえよりも，およげる**ように**なりましたね。

㊿ ずいぶん，およげる**ように**なりましたよ。

55 きっとじょうずにおよげる**ように**なりますよ。

より(1)

33 まえ**より**も，およげるようになりましたね。

られる(5)

㊵ わたし，こんなにたべ**られ**ないわ。

㊻ あっ，ぜんぶはたべ**られ**ませんよ。

㊼ こことと，ここしかたべ**られ**ません。

㊳ ええ，もう，たべ**られ**ません。

㊷ あそこまでいって，にじっぷんやさんじっぷんでもどってこ**られ**ません。

れんしゅう〔練習〕(1)

⑧ じゃあ，このきかいに**れんしゅう**するといいですよ。

わ(4)

⑩ おにいさんにならうといい**わ**。

㊵ わたし，こんなにたべられない**わ**。

㊶ おどろいた**わ**。

㊹ ずいぶん，しんぱいした**わ**。

わあー(1)

㊲ **わあー**，すごいなー。

わたし〔私〕(3)

⑦ **わたし**は，ほとんどおよげません。

⑬ じゃあ，**わたし**たちは，およぎにいきましょう。

㊵ **わたし**，こんなにたべられないわ。

を(7)

㉕ からだ**を**，こうたてて，およぐといいですよ。

㉚ て**を**かきながら，あしをあわせます。

㉚ てをかきながら，あし**を**あわせます。

㉛ もうすこし，おおきくて**を**かくといいですよ。

㊽ ほら，むこうにつり**を**しているひとがみえるでしょう。

㊿ つり**を**しながら，ねむっていたんです。

㊾ つり**を**しているひとがいたんですよ。

ん(7)

㉔ いきがしにくい**ん**ですね。

㊼ もう，いい**ん**ですか。

⑱ ねむっていたんですか。

⑳ つりをしながら，ねむっていたんです。

㉘ どこへいっていたんですか。

㉜ つりをしているひとがいたんですよ。

㉝ なにがつれていたんですか。

資料2. シナリオ全文

題　名	日本語教育映画 「あのいわまで およげますか」——可能の表現——
企　画	国立国語研究所
制　作	日本シネセル株式会社
フィルム	16%EKカラー・スタンダード
巻　数	全1巻
上映時間	5分
現像所	東映化学
録　音	読売スタジオ
完　成	昭和54年9月13日

制作スタッフ

制　作	静永純一	制作担当	佐藤吉彦
脚　本	前田直明	演　出	前田直明
演出助手	野田　章	撮　影	赤松龍彦
撮影助手	白岩　卓	照　明	大友敏法
照明助手	工藤和雄	音　楽	吉田征雄
録　音	小川正城（読売スタジオ）		
ネガ編集	斉藤康一		

配　役	和　夫	伊藤知則
	真理子	杉岳智子
	夏　子	下条千恵子
	明	松田辰也
	つり人	岡田吉弘

カット	画　　面	セ　リ　フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」	
2	テーマ・タイトル 「あのいわまで　およげますか」 ——可能の表現——	
3	<駅のホーム> 和夫・真理子F・S 和夫・真理子（ふだん着）待っている	
4	列車F・S 列車が入ってくる	
5	和夫・真理子PAN四人 列車が着いて，夏子，明，降りてくる。簡単な友達どうしのあいさつ	
6	駅の階段を上る四人	
7	四人からPAN海 ブリッジの上からは，海が家々の向こうにかいま見られる	和夫「①ほら，あのうみですよ。」
8	<浜辺> 四人F・S ゆみなりをした浜辺	和夫「②あきらくんは，およげますか。」 明「③あそこのいわぐらいまでは，およげます。」
9	海の中に岩場が見える 岩場F・S	
10	和夫UP	和夫「④ほーお。 ⑤ずいぶん，およげますね。」
11	和夫・夏子W・S PANして夏子・真理子W・S	和夫「⑥夏子さんは？」 夏子「⑦わたしは，ほとんどおよげません。」

		真理子「⑧じゃあ，このきかいにれんしゅうするといいですよ。」 夏子「⑨ええ。」 真理子「⑩おにいさんにならうといいわ。 ⑪ね，おにいさん。」
12	四人F・S	和夫「⑫うん。」 真理子「⑬じゃあ，わたしたちは，およぎにいきましょう。 ⑭ね，あきらくん。」 明「⑮うん。 ⑯むこうのいわまでいけますか。」
13	明と真理子F・S 二人，泳ぎはじめる	真理子「⑰（軽く）うん。」
14	和夫・夏子B・S	和夫「⑱あきらくんは，なかなか，じょうずにおよぐことができますね。」 夏子「⑲ええ。 ⑳まりこさんも，じょうずですね。」
15	明・真理子F・S 泳いでいく明，真理子	
16	＜海の中で＞ 夏子・和夫F・S 夏子・平泳ぎで和夫のところまで	和夫「㉑さあ，そこからここまでおよぐことができますか。」
17	やっとたどり着く 夏子・和夫B・S	
18	和夫・夏子UP	和夫「㉒およげるじゃあない

		ですか。」 夏子「㉓でも，すこしです。」
19	和夫Ｂ・Ｓ ＰＡＮして夏子Ｂ・Ｓ手で形を示す	和夫「㉔いきがしにくいんですね。 ㉕からだを，こうたてて，およぐといいですよ。 ㉖かおがあがって，いきがしやすいです。 ㉗やってみますね。」
	手本を示すために，和夫泳ぐ	
20	和夫ＵＰ	和夫「㉘さあ，およいでみてください。」
21	夏子，泳ぎはじめる	ｏｆｆ和夫「㉙そう，そう，うまいですよ。—— ㉚てをかきながら，あしをあわせます。 ㉛もうすこし，おおきくてをかくといいですよ。 ㉜うまい，うまい，うまいですよ。」
22	夏子，だんだん息ぐるしくなって，立ちあがる 夏子ＰＡＮして二人Ｂ・Ｓ	和夫「㉝まえよりも，およげるようになりましたね。」 夏子「㉞ええ。」 和夫「㉟さあ，むこうまでいっしょにおよぎましょう。」 夏子「㊱ええ。」
23	和夫・夏子Ｆ・Ｓ 泳ぎはじめる二人	

24	四人F・S カニが大皿にのって運ばれてくる	明「㊲わあー，すごいなー。 ㊳いただきます。」 三人「㊴いただきます。」
25	夏子・明PANして明・和夫二人	夏子「㊵わたし，こんなにたべられないわ。」 明「㊶だいじょうぶ，だいじょうぶ。 ㊷ぼくがたべますよ。」
	かにの甲羅を指して	明「㊸これ，たべにくいですね。」 和夫「㊹それはね，こうすると，かんたんにとれます。 ㊺ほら，たべやすいでしょう。」
26	和夫ナメ明B・S 明，殻を取ってかぶりつこうとする	
27	明ナメ和夫B・S （指し示して）	和夫「㊻あっ，ぜんぶはたべられませんよ。 ㊼ここと，ここしかたべられません。」
28	明UP 食べる明	
29	和夫・夏子・真理子B・S	真理子「㊽およぎは，じょうずになりました？」 夏子「㊾まだまだ，じょうずになりません。」 和夫「㊿ずいぶん，およげるようになりましたよ。」
30	明UP （食べながら姉に）	明「51なんメートルぐらい？」
31	和夫・夏子・真理子B・S	和夫「52もう，に，さんじゅ

	（夏子に）	うメートルは，およげますよね。」
	（夢中で食べながら）	ｏｆｆ明「(53)そうですか。」
		真理子「(54)それは，すごいですね。 (55)きっとじょうずにおよげるようになりますよ。」
		夏子「(56)ごちそうさま。」
32	夏子ナメ和夫	和夫「(57)もう，いいんですか。」
33	和夫ナメ夏子Ｂ・Ｓ	夏子「(58)ええ，もう，たべられません。 (59)おおすぎますね。」
	明，大皿からもう一匹取る	夏子「(60)あきら，たべすぎじゃないの。」
34	四人Ｆ・Ｓ 明のおう盛な食欲を見る三人	明「(61)だいじょうぶですよ。」
35	＜浜辺＞ 明・真理子	明「(62)むこうまでいってみましょうよ。」
		真理子「(63)どこ？」
		明「(64)ほら，むこうに
36	つり人Ｆ・Ｓ	つりをしているひとがみえるでしょう。 (65)あそこまで。」
37	明・真理子Ｂ・Ｓ	真理子「(66)とおすぎますよ。 (67)あそこまでいって，にじっぷんやさんじっぷんでもどってこられません。 (68)おねえさんがしんぱいしますよ。」
		明「(69)だいじょうぶ。

		(70)いってみましょうよ。」
38	明・真理子F・S 明，泳ぎだす。真理子も，しかたなくついて行く	
39	＜つき出た磯＞ 明・真理子　二人F・S 岩を登って来る明，真理子二人，つりざおを見つける あたりに人気はない	明「(71)おかしいな，だれもいませんよ。」 真理子「(72)へんですねー。」
40	岩陰から素足の先が見える 足UP	
41	明・真理子F・S （指さす）	真理子「(73)きゃー。」 明「(74)えっ。」 真理子「(75)あしが。」 明「(76)あっ。」
42	若いつり人，その声で起きる つり人B・S	
43	明UP	明「(77)なあーんだ。 (78)ねむっていたんですか。」
44	つり人UP	つり人「(79)ええ。 (80)つりをしながら，ねむっていたんです。」
45	真理子UP　切れる	真理子「(81)おどろいたわ。」
46	明・真理子F・Iして三人	明「(82)なにがつれますか。」 つり人「(83)くもがつれますよ。」 明「(84)えっ，くも？」
	つり人，笑いながら足元のバケツを指差す	つり人「(85)ほら，くもがあるでしょう。」
48	明・真理子W・S バケツの中に雲の映りを見る	明「(86)ほんとだ。

	二人，笑う	㊲くもがつれてますね。」
49	＜浜辺＞	
	夏子，和夫F・S	
	二人，立って沖を見るている	
50	明・真理子F・S	
	明，真理子，二人の見ている方向と反対のなぎさを歩いてやって来る	
51	夏子・和夫	
	夏子，ふりかえって二人を見つける	夏子「㊳どこへいっていたんですか。 ㊴ずいぶん，しんぱいしたわ。」
	明・真理子F・Iする	真理子「㊵ごめんなさい。 ㊶あのみさきまでいっていました。」 明「㊷つりをしているひとがいたんですよ。」 和夫「㊸なにがつれていたんですか。」 明「㊹くもがつれていました。」
	和夫，夏子，少し驚いて，いぶかしそうに	和夫「㊺くも……。」
	明，真理子，いたずらっぽく笑う	
52	雲UP	
53	企画・制作タイトル 企画　国立国語研究所 制作　日本シネセル株式会社	

日本語教育映画解説17
あのいわまで　およげますか
——可能の表現——

昭和57年３月

国　立　国　語　研　究　所

〒115　東京都北区西が丘３—９—14
電話 東京（900）3111（代表）